第28号

実践女子大学

生活文化フォーラム

生活のありようを探究する

主任挨拶

Ⅰ　研究紹介、地域連携活動紹介
①日野で学ぶ、地域とつながる　②よりよい生活のありようを求めて

Ⅱ　授業紹介、活動紹介
①生活の営みと生涯発達をとらえる　②コミュニケーションの基礎を育む
③地域や人と繋がる　④専門性を高める　⑤イベント報告

Ⅲ　学生の取り組み
学生の生活紹介　下田歌子賞受賞者　就活・院試体験記　卒論題目一覧

実践女子大学　生活科学部生活文化学科　２０２４年２月

生活文化フォーラム　第二十八号　生活のありようを探究する
実践女子大学　生活科学部生活文化学科

実践女子大学　生活科学部生活文化学科
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1
TEL 042-585-8918　FAX 042-585-8919
https://www.jissen.ac.jp/learning/hles/seibun/

第28号

実践女子大学

生活文化フォーラム

生活のありようを探究する

主任挨拶

Ⅰ　研究紹介、地域連携活動紹介
①日野で学ぶ、地域とつながる　②よりよい生活のありようを求めて

Ⅱ　授業紹介、活動紹介
①生活の営みと生涯発達をとらえる　②コミュニケーションの基礎を育む
③地域や人と繋がる　④専門性を高める　⑤イベント報告

Ⅲ　学生の取り組み
学生の生活紹介　下田歌子賞受賞者　就活・院試体験記　卒論題目一覧

実践女子大学　生活科学部生活文化学科　2024年2月

主任挨拶

本学生活文化学科 主任 島﨑 あかね

いつの間にか、日本には四季がなくなってしまったのかと思うほど、春と秋の過ごしやすい季節が感じられないまま、夏の猛暑が続いた二〇二三年度も残すところわずかとなってまいりました。日頃は本学生活文化学科の教育にご理解・ご協力いただきありがとうございます。二〇二〇年度から続いた新型コロナウイルス感染症への対応もだいぶ緩和され、多くの授業が対面で実施されることになり、学生が登校する姿がキャンパスに戻ってきました。感染対策は引き続き実施しながら、それでも同じ志を持つ仲間と切磋琢磨しながら学びを深めていくことの充実感を学生だけでなく教職員も感じている毎日です。特に今年度入学した一年生は、高校三年間がコロナ禍でさまざまな制約・行事の中止などを経験してきた学年であるため、入学式も対面で実施できたことは、そこから始まる大学生活への期待や目指す夢への扉を開くことに繋がったのではないかと思っております。

ご存じのように、生活文化学科は「家庭・社会・人間の生活を心理学から科学する」生活心理専攻と、「一人ひとりの個性を見つめ、子どもの育ちを支える」幼児保育専攻の二専攻を配し、「生活のありよう」について教育を進めております。生活心理専攻においては、学生それぞれの希望する進路に合わせた三つのゆるやかなコースプログラム（履修モデル）を用意し、生活課題を捉え心理学的視点から分析・解決する力を身につけ、社会で活躍できる人材を育成しております。「心理専門職コース」も第一期生が福祉機関や医療機関での心理実習を無事に修了して卒業し、それぞれ児童福祉施設や高齢者や障害者の雇用支援の現場へ入職しました。また「家庭科教員コース」「キャリア心理学コース」で心理学の基礎を学び、カウンセリングマインドを持った教員・職業人として、それぞれの企業や学校、公務員として自治体で活躍しています。幼児保育専攻では、幼稚園教諭免許・保育士資格の取得を目指す「幼保コース」と幼稚園教諭・小学校教諭免許の取得を目指す「幼小コース」がありますが、人間性豊かで信頼できる、質の高い保育士・幼稚園教諭・小学校教諭を養成するべく、一、二年次から日野市内の保育所、幼稚園、小学校、福祉施設等と連携を図り、実習やボランティア、地域活動を通して学内で修得した理論を実際に体験することで、理論と実践を往還する学びの機会を大切にしています。毎年、十名前後が幼小コースを選択しますが、二〇二三年三月に卒業した九期生までの七五名のうち六一名が全国の小学校の教壇に立っています。また、幼保コースの卒業生も、公立保育所を始め、幼稚園や児童福祉施設の現場で、子どもと子どもを取り巻く環境で四年間の学びを胸に活躍しています。少子高齢化が続く日本ではありますが、保育や教育に携わる仕事は決してなくなることはなく、逆により多岐にわたる支援の在り方や保育者・教育者の質の高さが求められていることを鑑み、学生一人ひとりと丁寧に向き合い、指導することで優秀な保育者、教育者を輩出し続けることも本専攻の目標です。

コロナ禍を経て、教育や学びの在り方は大きく変化したともいえます。一時的とはいえ、キャンパス閉鎖を経験しオンラインで動画や資料を視聴・閲覧するスタイルの授業や、テレビ会議システムを活用してパソコン越しに受講する授業など、高校時代にも経験した多様な学びのスタイルが、大学に入っても継続されていることへの不安もあったと思います。今年度は感染症対策がずいぶん緩和されていますが、完全にコロナ前の姿に戻ったとは言えません。マスクの着用も本人の意思を尊重していますが、学生たち本来の笑顔や笑い声がキャンパス内に戻るまでにはもう少し時間がかかりそうです。個々の生活や対人支援の場面においてはマスクによって表情の表出がされにくく、実習やフィールドワークの活動への影響も少なからず残っています。その中にあっても、学生はこのような状況を逆手にとって、学生たちは学年を越えた交流の場を創出してくれています。二年生による新入生向けのフレッシュマンセミナーの企画・運営、三年生によるゼミナール紹介のランチ会、四年生の卒論中間報告会のZoom配信など、学生同士が連携し合い、学生生活がより良く充実したものとなるような工夫を考え実践しています。学生一人ひとりの行動力には力強さを感じるとともに、対応力や物事に対する柔軟性を持ち合わせ、着実に成長していく姿を誇らしく思います。本学での四年間の学びを通して、日常生活の中に潜むさまざまな問題に真摯に取り組み、多彩な現場で応用できる課題解決力や柔軟な思考を体得してほしいと願っています。

本学科は衣食住をそのテーマとする、まさに「生活のありよう」をさまざまな視点から取り上げ課題を解決するための教育が整備されております。今年度は四名の先生を新しくお迎えしました。一五名の教員と四名の助手が一丸となって、学生との体験的な学びを共有しコミュニケーションの土台を構築するために、それぞれの専門領域はもちろん、「生活」「子ども」「心」を中心とした「生活のありよう」を多角的に捉え教育していくことで、学生の学びが広がり、かつ深まること、社会人として大学を巣立つときにそれらの知識と技術・技能を活用できる力を身につけてもらえるよう、社会動静に注視しつつ、また、渋谷キャンパスに新しい学部が誕生するなど、大学全体が改革に向かう中、生活文化学科らしさを失うことなく、これまで以上に学生一人ひとりと丁寧に向き合っていきたいと改めて感じております。

今年度の生活文化フォーラムでは、本学科所属の先生方が「日野で学ぶ、地域と繋がる」「より良い生活のありようを求めて」といったコンセプトに即して、各教員の研究や地域連携活動、授業の紹介をしております。また、学生による学校行事や就職活動への取り組みなど、学生目線での紹介ページもございます。ぜひ生活文化学科の日常の一端をご高覧いただければ幸いでございます。

I 研究紹介、地域連携活動紹介

❶日野で学ぶ、地域と繋がる　❷よりよい生活のありようを求めて

〔生活心理専攻〕

■ 日野で学ぶ、地域と繋がる
「日野の家族」を知るフィールドワーク …… 6
笠原　良太　本学生活文化学科 専任講師

■ よりよい生活のありようとは？
～文化、社会、第一印象から考える～ …… 8
作田 由衣子　本学生活文化学科 准教授

■ 日野市発達・教育支援センター「エール」での活動…… 10
塩川　宏郷　本学生活文化学科 教授

■ 2023年度の研究紹介 …… 12
髙橋　桂子　本学生活文化学科 教授

■ 生涯発達におけるwell-beingの多面的アプローチ … 14
塚原　拓馬　本学生活文化学科 准教授

■ 「自閉スペクトラム症児のための
包括的発達支援プログラム」の開発 …… 16
長崎　勤　本学生活文化学科 教授

■ 2023年度心理学プロムナード
（本学学園祭：常磐祭 日野キャンパス 心理学体験コーナー）…… 18
水野 いずみ　本学生活文化学科 准教授

〔幼児保育専攻〕

■ 保育実習（保育所）の自己開拓について …… 20
野尻　美枝　本学生活文化学科 准教授

■ 「日野市保育の質ガイドライン策定に向けて」
―「子ども主体の保育」の実現を目指して― …… 22
井口　眞美　本学生活文化学科 准教授

■ 教育現場での得難い学び～日野市立小学校との連携… 24
井上　陽童　本学生活文化学科 専任講師

■ 子ども包括支援センター「みらいく」
子育てひろばワークショップに参加して …… 26
大澤　朋子　本学生活文化学科 専任講師

■ 日野市「手をつなごう・こどもまつり」活動報告 …… 28
小坂　光　本学生活文化学科 助教

■ 就職支援報告
―公務員（保育・教育職）就職支援の取組― …… 30
田中　正浩　本学生活文化学科 教授

生活心理専攻

■日野で学ぶ、地域と繋がる「日野の家族」を知るフィールドワーク

本学生活文化学科 専任講師 笠原 良太

四月に着任して以来、「日野は遠い」、「渋谷キャンパスがよかった」という学生の声をよく耳にします。学生が「日野ならではの学び」をもっとできれば、積極的に登校・参加してくれると考え、ゼミや演習系の科目でフィールドワークを始めています。

私は家族社会学を専門として、家族が産業・地域のなかでどのように生活しているのか、子どもがどのような環境で発達しているのかについて研究しています。「日野の家族」については、これまでほとんど調べたことがなかったため、学生とともに一から学んでいます。

フィールドワークの第一歩は、「街歩きをして地域の雰囲気を体感すること」。どのような施設があり、どういう人たちが住んでいるのか、日野や豊田、高幡といった街を歩くなかで体感します。そうすると、「緑が多い」、「戸建住宅と団地が多い」といった気づきをえられます。また、市が発行している掲示・配布物から、何が課題なのかを予想します。授業内で街歩きに十分な時間がとれない場合、通学中に観察してもらったり、日野市内に住んでいる学生に聞いて情報を得ます。これらをとおして、日野にはどのような家族が、どういう形態で仕事・生活しているのかのイメージを膨らませます。

つぎに、公的統計データや市の発行物から、家族の実態をグループで確認します。人口や世帯類型、従事している産業、高齢化率、通勤時間・場所などの統計データは、ほとんどオンラインで閲覧できます（政府統計の総合窓口（e-stat）、日野市立図書館ホームページ）。その結果、日野市には、核家族、なかでも子育て世帯が多いこと、家計支持者が都心のサービス産業に従事しているため通勤時間が長いことなどがわかります。これらの内容は、日野市が発行している『とうけい日野』（統計書）で、一九六八（昭和四三）年以降の推移を辿ることができます。

こうした調べ学習を経て、ようやく人に会って話を聞くことができます。上記の結果をもとに、通勤場所・時間の違いが家族生活にどう影響しているのか（ワークライフバランス）、市民が性別に関係なく家族・地域・政治などの領域で活躍できているのか（男女共同参画）、そうした状況・課題に対して市はどのように取り組んでいるのかについて、学生が主体となって質問文を作成し、インタビューの対象を選定しました。今年度は、「男女共同参画と生活」という授業の受講生十名とともに、日野市男女平等推進センター（豊田）を訪問し、担当の職員にお話をうかがうことにしました。

インタビューの前に、同センターが位置する多摩平の森ふれあい館内の各種展示と施設を見学しました。ちょうど一階では、ＤＶ防止・啓発パネル展「Ｓｔｏｐ Ｔｈｅ ＤＶパネル展」が開催されており、「デートＤＶ」など、学生にとっても身近な問題であることを確認しました。同センターには、地域子ども家庭支援センター多摩平「はぴはぴ」や日野市立多摩平図書館が併設されており、利用者も多く、地域の拠点として重要な施設であることを理解しました。

その後、一時間ほどの時間をいただき、男女平等推進センター（日野市平和と人権課）職員に、学生から質問をしました。一年生が多く、インタビューに不慣れな学生が大半でしたが、準備の成果もあり、同センターの取り組みや地域の現状についてうかがえました。日野市では、「第四次男女平等推進行動計画」のもと、ライフステージごとの支援に力を入れており、出産・子育て等で離職した女性に対する再就職支援や性的マイノリティへの理解を深めるための定期講座やイベントを実施しています。また、日野市と同じく郊外型都市である多摩地区十一市との連携を強化しており、家族や男女共同参画に関する共通課題に取り組んでいるようすでした。

インタビュー後の授業では、必ず振り返りを行い、学生の気づきや疑問を共有し、さらに深掘りするテーマや興味関心を洗い出します。そして、学期末のレポートで、よりよい家族生活や男女共同参画社会にむけて必要な取り組みなどを提示してもらいます。

このほか、家族社会学ゼミナールでは、十二月に子ども家庭支援センターを訪問し、日野市における子育て期の家族問題について、詳細なインタビュー調査を実施する予定です。

今年度は、私が赴任したばかりで、準備不足でしたが、来年度以降は、行政職員だけでなく、実際に日野市に居住している家族のインタビューなどを実施していきたいと考えています。そして、地域と連携し、「日野ならではの学び」を推進することで、日野キャンパスの魅力をさらに引き出していきます。

生活心理専攻

■よりよい生活のありようとは？ ～文化、社会、第一印象から考える～

本学生活文化学科 准教授 作田 由衣子

「人間とは社会的動物である」というフレーズがあります。人は単独で誰ともかかわらずに生きていくことはできません。たとえ誰とも会話を交わさずに生活する人がいたとしても、そうした人も含め誰もが日々、誰かの作った服を着て、誰かの作った作物を使ったご飯を食べて、誰かの整備したインフラを利用して生きているでしょう。それは一人では生きていけないという人間の弱さであると同時に、協力すれば生きていけるという人間の強みでもあります。

最近、「文化がヒトを進化させた」（ジョセフ・ヘンリック、二〇一九）という本を読みました。冒頭にはこれでもかと、人間が不慣れな環境下で生きていくことの困難さと、他者の知恵の蓄積（文化）を利用して生き延びた人たちのエピソードが紹介されています。いくら知能が高く文明を持つ人間たちであっても、初めて訪れた土地では、そこで育つ植物を食べるための方法など、環境に適応するための知識を持たなければ、生き延びることはできません。たとえば私たちは普段、何の疑問も持たずに米を食べていますが、食べられるようにするためには精米し、研ぎ、水に浸し、時間をかけて炊く必要があります。もしこの知識や道具を持たなければ、生のまま米をかじるしかないかもしれないし、そもそも食べられるとは思わないかもしれません。すなわち、私たちの生活は、文化によって大きく規定されていると言えます。

ここ数年、文化とそれによる心理への影響について考えています。元々、文化差に関心を持ったきっかけはアレクサンダー・トドロフ教授の研究（Cogsdill et al., 2014）の中で、「信頼感が高い顔」や「有能そうな顔」の例として挙げられていた顔画像がそうは見えなかったことでした。画像が間違っているのではないかとご本人に伺ったほど、個人的にどうしても納得がいきませんでした。いろいろ文献を読んでみると、どうやらアメリカなど欧米の多くの文化圏の方は微笑んでいるように見える顔を信頼できると判断する傾向にあるようでした。一方で、日本人は必ずしもそうではありません。欧米では歴史的に、近い地域内に複数の民族が住んでいたり、他の国との行き来も盛んであったりするため、自分が敵ではないことを明示するためよく笑顔を表出するという話を聞いたことがあります。一方日本では（特に男性や地位の高い人は）むしろ公共の場では感情を抑制するべきだという規範があるとされています。このように表情の表出と読み取りにおいて文化差があるという話は昔から言われていますが、第一印象の知覚においてもそれが影響しているということになります。実際に、同じ顔を見たときにアメリカ人と日本人では印象の感じ方にどのような差があるのでしょうか？

そこで、第一印象の知覚に年齢差や文化差はあるかについて検討してみました（Sakuta, 2022）。日野市の保育園にご協力いただき、二～六歳児を対象として調査を行ったところ、年少児では顔を見たとき「いい人そうかどうか」の判断は日本人の成人よりもむしろアメリカ人に近いという驚くべき結果となりました。「強そうかどうか」という判断は、日本人幼児でも成人でもアメリカ人でもほぼ共通していました。以上のような結果は何を意味しているのでしょうか。一つの解釈としては、顔から直感的にいい人そうかどうかを判断する際には笑顔に見える特徴（上がった口角など）や女性的な顔立ちのような物理的情報に基づく処理がなされていますが、日本では成長するにつれて文化の影響を受け、異なる価値観に基づいた判断が混在するようになるのではないかと考えられます（この辺りはもう少し掘り下げて検討したいと考えています）。

現在、日本も海外からの旅行者や移住者を積極的に受け入れていく流れとなっています。特に東京など都市部では、以前に比べて、様々な文化をバックグラウンドに持つ方たちの割合が増えていくことが予想されます。そうした中で、前述の研究を踏まえると、異なる文化圏の人たちはお互いに表情の出し方に違和感を持つこともあるかもしれないし、印象よくしようと思っても逆効果になってしまうこともあるかもしれません。もしかすると、そんなところに文化差があるなんて思ってもみない人たちも多いのではないでしょうか。私たち自身が、実は自分たちの文化を知らない、あるいは当たり前すぎて他の文化圏との違いを意識できていないということはあり得ます。ずっと前から日本に住んできた人たちも、他の国から来た人たちも、よりよい生活を送るためには、自分たちの今いる環境を理解し、その土地の文化を知ることが重要なのではないでしょうか。

引用文献

ジョセフ・ヘンリック（二〇一九）「文化がヒトを進化させた　人類の繁栄と〈文化―遺伝子革命〉」白揚社
Cogsdill, E. J., Todorov, A. T., Spelke, E. S., Banaji, M. R. (2014). Inferring character from faces: A developmental study. Psychol. Sci. 25, 1132–1139. doi: 10.1177/0956797614523297.
Sakuta, Y. (2022). Face-to-trait inferences in Japanese children and adults based on Caucasian faces. Frontiers in Psychology. 13, 955194.

生活心理専攻

■日野市発達・教育支援センター「エール」での活動

本学生活文化学科 教授 塩川 宏郷

発達障害や子どもの問題行動などについて、毎年十回程度講演の依頼を受けています。この二年ほどは、新型コロナウイルス感染症の流行により、とくに対面でのミーティングや講演会などがほとんど行われませんでした。当該感染症の感染症法上の取り扱いが五類に移行することの是非はさておき、今年度はそのような依頼が少しずつ入るようになりました。これを機に、以前からやりたいと思っていた地域連携、特に発達障害のあるお子さんの保護者・支援者の支援（支援者支援）活動を始めようと考えました。

日野市に単身赴任して六年目になりますが、大学の中でもぞもぞするだけで地域に出て活動することはほとんどありませんでした。連携の伝手もなかったので、まずやったのは連携先を探す作業でした。日野市には通称「エール」という発達教育支援センターがあります。子どもの早期療育や発達支援、放課後デイサービスなどが行われていることを日野市のサイトで確認しました。その際、エールのメールアドレスを発見し、ここぞとばかりに自分は大学で教員をしているが、発達障害のある子どもの保護者支援をやりたい、やらせてくれという「押し売り」のようなメールを送りました。幸いエールのスタッフが寛容にも面会を許可してくださり、活動のプランをもってエールに出かけて行ったのが五月十六日、翌月からエールでの活動をスタートしました。

活動といってもやることは保護者を対象とした定例セミナーで、エールを利用している子の保護者で参加者を十名程度募り、定期的に話題提供と質疑応答をするというものです。五回シリーズで毎回テーマを決め、私から話題提供のプレゼンを行い、それについて保護者から質問を受けるという形式です。月曜日の午前中の一時間程度をあてました。

第一回セミナーのテーマは「発達障害とは何か」です。医療領域では、近年これまで使っていた発達障害という呼び名を「神経発達症」と言い換える方向になっています。これは、「障害」という漢字が字面的によくないというのと、医療と教育・福祉領域で取り扱う概念を分けるためです。「神経発達症」はもっぱら子ども本人の特性や症状を対象とするもので、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症などの症候群を診断する場合に使用する呼び方です。それに対して「発達障害」とは、神経発達症に伴う症状や行動面・認知面の特性によって、社会生活上なんらかの不適応が生じている「状態」を指します。つまり、発達障害は神経発達症プラス環境の相互作用を示す用語ということです。障害は常に環境との関係性の中に発生しているととらえる「社会モデル」に立脚している呼び方です。最初のセミナーでこの考え方を保護者・支援者と共有し、支援は「神経発達症のある子ども本人」と「その子をとりまく環境」の双方に働きかけることであるという考え方を議論しました。保護者からは実際にご自分のお子さんの行動面の問題や症状・徴候に対してどのように対応するのがよいのかという具体的な質問が多く寄せられました。

第二回のテーマは「自閉スペクトラム症」としました。ここでの話題は「スペクトラム」とはどういうものなのかが中心になりました。スペクトラムは「幅のある連続体」という意味です。例えば自閉症の診断基準には「社会的コミュニケーションの質的障害」「興味・関心の限定、こだわり行動」があげられていますが、それでは私たちの社会的コミュニケーションには何の問題もないのでしょうか。自分のコミュニケーション行動が完璧に正常であると考えている人は少ないと思います。つまり、私たちにも自閉症と共通する特性があるということです。診断名がつくかつかないかは、その特性によって日常生活や社会生活に不適応が生じているか否かで決まるわけです。症状には「濃度」のようなものがあり、濃厚状態からはっきりわからないほど薄い状態まで連続している、これがスペクトラムということです。

第三回のテーマは「注意欠如多動症」、ＡＤＨＤの略語で知られているものです。自閉症と並んで代表的な発達障害です。この回では、とくに子どもの行動面の問題に対する対応のしかたについて話し合いました。取り上げたのは応用行動分析の考え方や、環境を構造化するTEACCHプログラムの考え方です。これらは神経発達症のある子どもに働きかけるのではなく、問題が発生している場や環境を整備することに注目するという考え方です。問題となる行動には必ず理由があり、そのヒントはその行動が発生している場、状況にあります。子どもの行動を一つのストーリーとしてとらえ、そのストーリーをよりよいストーリーに変えるため、環境に働きかけるコツ・考え方のコツなどを話し合いました。

第四回のテーマは「薬物療法」です。私はこれでも小児科医のはしくれですので、薬を使った治療にも責任を有する立場です。そのうえで、保護者・支援者に知っておいてもらいたい薬物の作用機序や効果、副作用などについて解説しました。薬物療法は、神経発達症の治療の中心ではありません。症状を和らげて生活しやすくするための「道具」として上手に使うことが大切です。

第五回は、エールの事業と合体して発達障害についての講演会としました。テーマは「神経発達症のある子の思春期」です。第四回までは十五名程度の固定メンバーが参加者でしたが、今回は会場で四十人以上、オンラインでも五十人ちかくの人に参加していただけました。診断の告知や性的なこと、非行などを中心に思春期の問題について講演しました。

とにかくやってみよう、でスタートした連携？押し売り？活動ですが、次年度以降も継続したいと考えています。その上で、保護者・支援者のニーズをもっと取り上げながらよりよい医療・教育（保育）・福祉の連携について模索していくことが必要です。

生活心理専攻

■ 二〇二三年度の研究紹介

本学生活文化学科　教授　髙橋　桂子

専門は生活経済学で、最近の研究は金融リテラシー研究、高齢者の特殊詐欺、クレジット返済、奨学金返済、住宅ローンなど負債debtに着目した研究を行っています。金融リテラシーの研究をはじめた当初は貯蓄、家計管理や生活設計など主に家庭科の領域に関して関心があり量的調査を重ねておりました。それが二〇二二年から成年年齢の引き下げ、大学生などの日本学生支援機構の奨学金（学生ローン）の利用率五十％超え、また高等学校家庭科などでの直接金融の学びの開始などにより、研究の軸足を少しずつ貯蓄savingから借金debtへと移しております。

借金行動に関する私のスタンスは、借金をすること自体は大人にとり日常で問題ではない、大事な点はどの金融機関から借りるのかということであり、かつ、月利、日歩や利息は毎日コーヒー一杯分といわれた情報を、瞬時に、年利である金利に変換できるのか。さらに、借金の返済に金融機関にいった時、担当者から「全額返済されなくて結構です。どうぞ、利息分だけ、ご返済ください」といわれた時、素直に嬉しいと感じてはいけない、この表現のどこに多重債務に至る落とし穴が隠されているか、理解できるか。こういった能力を培っておくことが必要、というものです。他人のいうことを素直に信じがちな世代の若者たちに、時には相手の立場に立って考えてみること、オカネの借り貸しは善意のボランティアではなく、ビジネスであることなど、少しシビアかもしれませんが、考えてもらうようにしています。

今秋、体調を崩して自宅でゆっくりしていた時、ツンドク状態で放置されたままになっていた『負債と信用の人類学』を、ようやく読むことができました。これは、共著者の中に人類学者・小川さやか氏の名前を見つけたから、「これは面白いに違いない」と思って即決で購入した図書でした。予想通り！　面白い！　どこがといえばですね…いえいえ、ここでは申し上げません。ぜひ、皆さまもご一読ください。へえ、なるほど、ふむふむ、なんか、人生、豊かだなあ、人間くさくていいなあ、ちょっと、羨ましいかも…といった世界です。ぜひ、ご堪能あれ。その他、最近読んだ本の中でお薦めのものは、ベンジャミン・クリッツアー『21世紀の道徳』です。小難しい哲学・倫理を、まるで小説でも読むかのように読み易くかみ砕いて教えてくれます。この本は大学生の皆さんにもお薦めしております。

さて、コロナも一段落して、海外への渡航も制限がなくなってきました。この十一月、共同研究者のお一人にお誘いいただき、シンガポールで開催されたERAS International Conferenceという教育系の国際学会に参加・発表してきました。九十分三人一チーム制の発表スタイルで、私は韓国ソウル大学ご出身・米国でPh.D.取得という先生と、シンガポールご出身・オーストラリアでPh.D.という先生とのチームでした。三人のテーマも分析手法も国籍も多様なチーム編成ということもあってか、最終日の昼のプレゼンにも関わらず、多くの参加者をお迎えすることができました。私は今年度から本学共通科目として開講している「金融リテラシー入門」に関して、日本の金融リテラシー教育を取り巻く政策展開、大学における科目設定・カリキュラム開発での狙い、そしてResponによる学生の記述を用いた質的分析による発表を行いました（Concerns about money can be removed by attending a financial literacy class: Case study of Women's University in Japan）。参加者の関心は、日本で金融リテラシー教育が高校生で二〇二二年から必修科目になったこと、に集中しました。内容は？　反応は？

誰が教えるのか？　フィンテックはそこに含まれるのか？　これから十年先の金融経済環境をあなたはどう見ているのか？

など、でした。また、名刺交換で女子大学で勤務していますと名乗ると「何？　女子大学？　女子しか生徒がいないのか？　なぜ女子しかいないのか、結婚のための大学か？」といった質問や、日本から来ましたといえば「自分の妻は日本人だ（ご本人は中華系）。なぜ、日本人の女性は私の給料も管理したがるのか。妻は、日本ではそれが当たり前だというが、本当か」といった質問も。私は「夫の小遣い制」は様々なジェンダー問題を引き起こしている根源の一つであると考えておりますので、おもしろい議論をすることができました（夫婦の財布管理に関心がある方は、御船美智子1995, Pahl, J. 2005などが面白いです）。ご当地シンガポールでも金融リテラシー教育は最新トピックスで、当地ではＭＡＳ（Monetary Authority of Singapore：シンガポール金融管理局）やＭＯＭ（Ministry of Manpower：人材開発省）を中心に、Money Senseという国家経済教育プログラムを提供しています。お金に関して最新テクノロジーを搭載したＭＡＳギャラリーもＭＡＳビルディングの中に常設されており、誰でも自由に無料で見ることができる楽しい空間です。お薦めです。

その他、今年度は日本私立学校振興・共済事業団の助成を得て高齢者特殊詐欺に関する研究、本学プロジェクト研究所「ケイパビリティ×Nudge研究所（所長：島﨑あかね教授）」では、幼児・児童の経済認知、家庭科を勉強しはじめる小学校五年生・六年生を対象とした「予算化」の習慣化を目指す小学生向け小遣い帳の開発、などにも研究所メンバーの先生や幼稚園・小学校の先生たちと一緒に取り組んでおります。また、ご報告させていただければと思います。

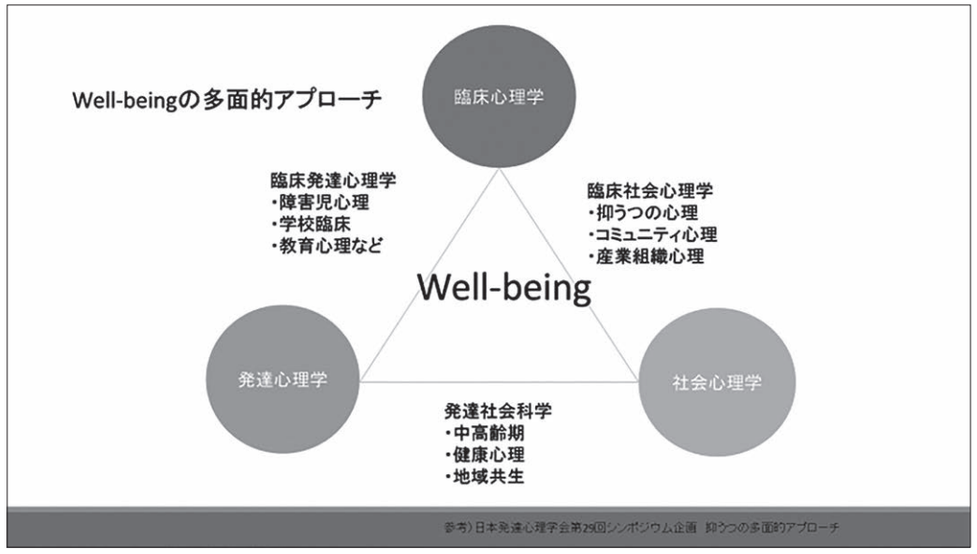
生活心理専攻

■生涯発達におけるwell-beingの多面的アプローチ

本学生活文化学科 准教授　塚原　拓馬

昨今、「よりよく生きる」ということがテーマになってきています。それは、前例のない高齢化社会を迎えて、どのように歳を重ねていくか、どのような生活様式を選択していくかなどについては、現代社会に生きる私たちが直面している課題であるといえます。そこで、今回は著者が研究テーマとしている生涯発達におけるwell-being（より良く生きる）について、心理学的多面的アプローチを紹介したいと思います。特に、「臨床心理学」「発達心理学」「社会心理学」の三領域の接点から検討していきます。

まず、「臨床心理学」と「発達心理学」の接点です。この領域では、主に幼児・児童・青年に対する教育や学校臨床（スクールカウンセリング）、そして障害児の心理について両者の知見を融合してくことで探究していきます。次に、「臨床心理学」と「社会心理学」の接点です。この領域では、様々なこころの問題に対して社会心理学的手法を用いて明らかにしていきます。また産業・組織論やコミュニティ論など社会的知見を融合して探究していきます。そして、「発達心理学」と「社会心理学」の接点です。この領域では、主に人がより健康的に生きることや地域で安心安全に暮らしていけることを考えていきます。そして、個としての発達と社会（環境）との相互作用を踏



まえつつ、より良く生きるとはどのようなことかを探究していきます。

こうした多面的アプローチをすることの意味はどのようなことでしょうか。それは、まず現代社会に生きる人の「生活のありよう」は複雑性があるためです。一般的には「多様性」という言葉で表現されているかもしれませんが、その裏面は「複雑性」を備えた生活であるとも考えられます。

例えば、高齢期の社会適応論において、それ以前の生活スタイルを継続した方がより適応的であるという「活動理論」と、現役生活とは異なり余暇活動や趣味、地域参加など新たなライフスタイルを形成することが適応的であるとする「離脱理論」があります。

しかし、「活動」か「離脱」かという二者択一ではなく、その時々の心身の状態や私生活の状況により、何が最適であるかは変化していくと考えられます。この変化過程による様相は、画一的な視点では捉えきれない特性を持ち、また様々な課題も伴います。心身の問題、家庭の問題、地域の問題、経済の問題などが複雑に絡み合って生じています。

このように、現代社会における人々の生涯発達とwell-being といった複雑な概念を考えるとき、多面的にアプローチをしていくことが不可欠となります。そして、多面的に視点により見出された知見をさらに精緻化し研鑽していくことで、複雑な様相を備えた「生活のありよう」に対する理解が少しずつ進んでいけると考えています。

さらに、このような多面的アプローチにより、現代人が直面する様々な生活課題に対して、どのような支援ができるか、解決の糸口は何かを明らかにしていくことができると考えています。無論、それは簡単なことではないかもしれません。しかし、様々な生活課題を少しずつでも解決していくことができれば、それは「よりよく生きる」ことに繋がり、複雑性のある社会でそれぞれの人が求める「well-being」に近づいていけると思います。

「よりよく生きる」とは何か。それは、青年期における自己確立（いわばアイデンティティ形成）と同様に、その答えは決して画一なものではなく、自分自身がどのような生活を形成して、自己を見出してしていくかにあると思われます。これからの私たちのライフスタイルの在り方は未知な段階にあるのかもしれませんが、一方ではこれまで先人達が知り得ない景色を体験できる期待も備えているのではないでしょうか。

（参考）

日本発達心理学会第34回大会企画シンポジウム資料「成人期・高齢期における発達の最適化とWell-being　発達、社会、臨床的知見による理解と支援」

生活心理専攻

■「自閉スペクトラム症児のための包括的発達支援プログラム」の開発

本学生活文化学科 教授　長崎　勤

長崎研究室では、自閉スペクトラム症のお子さんに大学に来ていただき、アセスメントに基づき、包括的発達支援プログラムを開発してきました。今回は、二〇二一年度に行われた、六歳（小学校特別支援学級一年生、発達年齢四歳台）の自閉スペクトラム症児A児を対象にしたプログラム（月に約二回、一回約二時間半指導）の一部を紹介します。

1. アセスメントから支援プログラム開発：テストバッテリー、行動観察、家族からの情報収集から、個別の指導計画を作成し、それに沿って、以下のような「自閉スペクトラム症児のための包括的発達支援プログラム」が構成された。

2. プログラムの目的：①明日を目指して発達を促す。「最近節領域」にアプローチする。②「いま・ここ」を楽しむ。生きていて楽しい、親子で過ごすことが楽しいと感じられるような「子供―養育者・きょうだい」の関わりを目指す。

3. プログラム

(1)はじまりの会

プログラムへの導入。呼名、日付と天気の確認、思い出紹介、一日の流れの確認、の順に行った。天気の確認では、その日の天気を晴れ・曇り・雨のイラストから選び、ボードに貼り付けた。思い出紹介では、ピア（一緒に活動に参加する学生）の前で写真を手がかりに過去の出来事について発表し、ピアからの質問に答えた。また、ピアが発表する際は、子供が質問をした。

(2)ゲーム活動（約二十分）

ゲームでは、ペアと花を運ぶリレーゲームによる協同活動を行った。ペアと役割の相互理解・目標の共有、ペアへの応援、「嬉しい／くやしい」の気持ちをペアと共有し調整することを通して、協同活動の成立を促すことを目的とした。

(3)劇遊び（約二十分）

劇遊びでは、「3匹のこぶた」を題材として行った。パネルシアターや紙芝居を用いて物語を確認した後、ピアと役割を交代しながら実際に演じていった。劇がはじまる前は、役割の確認・紹介をする「準備活動」を、劇参加後には物語の内容に関連する質問をする「振り返り活動」を取り入れた。「こぶた」と「オオカミ」の視点が異なる役を演じることによって、因果関係のある物語の理解を促すこと、他者の心的状態に気づく他者理解、そして劇遊びを通して心の理解を促すことを目的とした。

(4)言語活動（約十分）

「宝探しゲーム」を通してピアからの「〇〇にあります」といった構文の指示を理解して探すゲームを行った。さらに、それらの構文を自発で表現し、相手に伝達することを目的とした。

(5)音楽活動（約十分）

指導初期は、ギャザリングドラムで「音楽のおもちつき」の活動をした。大きなタイコをT児とピアで①同時に叩く②一人ずつ叩くという動作を行った。指導前期は、デスクベルで「ドレミファソのお話」という活動をした。ピアと二人組で演奏し、役割交代を行った。指導中期は、ミニ・コンガとサウンド・シェイプを用いて「カエル・ブギ」という活動をした。指導後期は、大中小の三つのタイコを使い「くまさんのタイコ」という活動をした。三種類のタイコの演奏を行い、自分のタイコのパートを演奏する。

(6)おやつ活動（約二十分）

おやつでは、「カルピス」づくりを用いたカフェごっこを行った。カスタマー役、ウエイター役、コック役を参加者と役割を交代しながらカフェごっこを行った。役割交代を行い、カフェごっこが終わった後に全員で「カルピス」を飲みながら他者意図理解、会話を促すことを目的とした。

(7)自由遊び（約二十分）

保護者面談をしている間、指導者二、三名とボールやブロック、ごっこ遊びなどの自由遊びを行った。

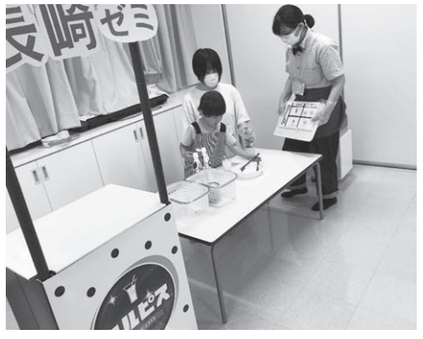
(8)家庭との連携：保護者面談・カウンセリング・家庭課題（約二十分）

家庭や学校での様子を伺い、家庭支援のアドバイスを行った。家庭課題シートを渡し、家庭で取り組んでもらい、次回に持参していただき、次の家庭課題を検討した。また学級訪問を行った。

指導経過については小園・高嶋・吉井・板倉・長崎（二〇二三）等を参照ください。

●謝辞：㈱アサヒ飲料様には研究協力を頂きました。科学研究費補助金、実践女子大学研究助成の補助を頂きました。

●文献：小園知沙・高嶋詩緒・吉井勘人・板倉達哉・長崎　勤（二〇二三）自閉症児への包括的発達支援プログラムの開発（3）―劇遊び「おおきなかぶ」による5歳自閉症児への物語理解・自己理解・情動の発達支援―日本発達心理学会第33回大会論文発表集 4PM1-G-PS24.



生活心理専攻

■二〇二三年度心理学プロムナード

（本学学園祭：常磐祭　日野キャンパス　心理学体験コーナー）

本学生活文化学科　准教授　水野　いずみ

二〇二三年度の常磐祭は、コロナ禍を経て、制限のない完全対面で開催されました。今年度、常磐祭日野キャンパスでの心理学体験コーナー「心理学プロムナード」は、本学科の認知心理学研究室・社会心理学研究室の三年ゼミ生を中心に企画・運営・開催されました（写真1・2・3・4）。二日間で延べ一五〇名以上のみなさまが本コーナーを訪れて、コロナ禍前と同様の来場者数となりました。

心理学プロムナードは、チラシの作成（写真5）など、準備段階から終了後の片付けまで学生たちが実施しており、日頃の学びで経験している様々な心理学機器を、地域の方々など、幅広い来場者に親しんで頂くことを目的としています。そのなかで、学生たちも、企画・運営能力や、いらした方に合わせたコミュニケーションをとる力を身につけていけるようになります。心理学プロムナードは、常磐祭で長らく開催してきているため、来場者として楽しんでいた学生が入学し、ゼミ生として、運営側となる例もみられています。

今年度は、学生からの発案で、錯視体験工作（写真6）や、学祖下田歌子先生のお写真をカードにしたもの（写真7）を来場者にお渡しし、生活科学部の心理系について広く親しんで頂くことなどが行われました。下田歌子先生のお写真をカードにしたものについては、本学図書館に申請を行い、画像（表）を使用させて頂きました。申請書の作成時にも、どのような内容にするとよいかについて、学生たちが検討を行いました。

学祖のお写真をカードにしたものについては、状態を保てるようにするためラミネート加工し、在学生によるメッセージを添えるなどもしながら来場者にお渡しして、しおりなどとして用いて頂けるようにしました。カードに添えたメッセージのなかには、学祖が故郷を出られる際に詠まれた「綾錦　着て帰らずば　三国山　またふたたびは　越えじとぞ思ふ」という和歌（写真8）もありました。また、作成したサンプルについて、学生たちは自分の携帯電話のケースに入れて身に着け、常磐祭を楽しんでいました。学生たちは、地域の方々や本学スタッフに支えられ、充実した学生生活を送っています。

表　学祖のお写真をカードにしたものに用いた資料（4点）一覧

共通事項	文庫名：下田資料
出納番号	資料名
2765	〔実践女学校開校式の時〕
1083	洋装ボンネット着用の肖像
1319	校長室にて
2636	下田歌子絵姿

写真1

写真2

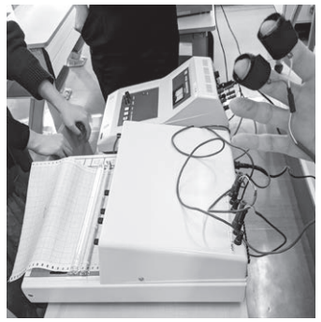


写真3

写真4

心理学プロムナード
チラシ2023
水野ゼミ岡本麻奈
さん作成

写真5

写真6　錯視体験工作

写真7　学祖のお写真をカードにしたもの

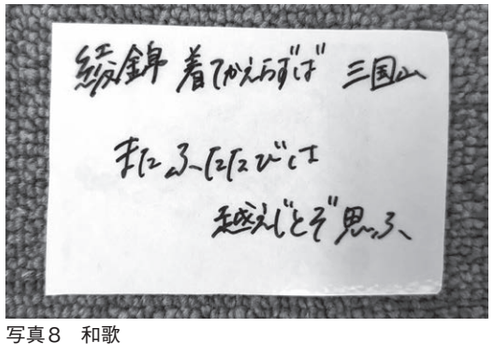


写真8　和歌

幼児保育専攻

■ 保育実習（保育所）の自己開拓について

本学生活文化学科 准教授　野尻 美枝

厚生労働省は、国家資格「保育士」の取得に際して、合計三回の実習を義務付けています。実践女子大学では、三年次の六月に保育所実習、続いて保育所以外の児童福祉施設実習を五月雨式で実施しています。三年次に二種類の児童福祉施設実習を体験した学生たちは、同学年の十月末までに最終実習先の（保育所・施設のいずれか一施設）選択を行うのですが、本学における保育実習の特徴は、学生による実習先の自己開拓といえるでしょう。

特に保育所実習では、実習を希望する学生全員が、原則として一度は保育所へ実習受け入れを自分でお願いするよう指導しています。先述のように、最初の保育所実習は三年次の六月に実習日程を設定しています。この時期に実習をさせていただくためには、前年度から実習を引き受けてくださる保育所探しをする必要があります。そこで私ども教員は、二年次後期開始間もない時期に説明会を開催し、どのように保育所を探したら良いのか、また、実習をお願いしたい保育所が決まったら、どのようにお電話でご説明したら良いのか等々、学生が見通しをもって主体的に取り組めるようにレクチャーをしています。

たとえば、最初の保育所実習先は、現住所から通える保育所に依頼すること、という条件を設けているのですが、一つひとつに理由があることを学生に説明しています。現住所から通えることという条件は、学生が週末を利用して大学へ来て、いつでも質問できるように、また、悩みや不安がある場合に教員がすぐに実習先へ駆けつけられるように、といった意図や配慮によるものです。

実習開拓の開始時期は、本学へ入学して一年半を経過した頃となりますので、学生たちは保育やその隣接領域に関する基礎知識を修得しています。それらをふまえながら自分の居住区にどのような保育所が点在しているのかを知ることは、とても大切な学びの一つと位置づけることができるでしょう。

学生たちは、真剣なまなざしで保育所調べに臨んでいます。近年は、スマートフォンを用いて園のホームページやブログ、SNS等からアプローチする学生

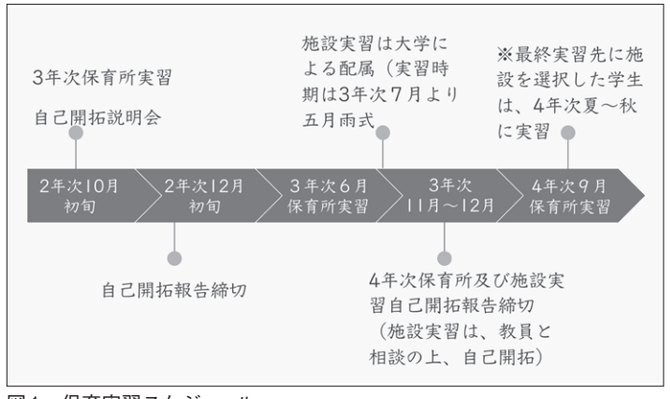


図1　保育実習スケジュール

も少なくありません。社会的な潮流と相俟って、インターネットを活用した情報収集をファーストアプローチとして取り組む傾向は顕著な気がします。しかし、実習担当教員としては、保育を学んでいる学生だからこそ、インターネットの情報だけに左右されることのない「心」も育んでほしいという願いがあります。そこで、じっくり決められるように、自己開拓説明会の開催から実習園決定報告の締切日までは、二ヶ月ほど空けて設定しました。この間の学生の過ごし方は、さまざまです。中には、「いくつかの園でボランティア体験をさせていただいてから実習先を検討したいです。」と、目を輝かせて話す者もいます。体験を通して学ぼうと自主的に行動する心もちの成長は、本学が実施している「自己開拓」から生み出される嬉しい教育効果なのかもしれません。

他方、初回実習では現住所から通えるところ、としていた条件を四年次の最終保育実習先として学生が保育所を選択した場合には、これを緩和しています。卒業後の進路選択を考慮し、帰省して実習をすることに大きな意味があるからです。今年度もおかげさまで、実習後に就職のお声がけをいただいた事例が数多くありました。

このように、保育実習における自己開拓を経た学生たちは、自分で保育所を探し、実習受け入れのお願いをしたことで、現場でのより深い学びが得られたようです。

最後に、学生の振り返りレポートの中から「憧れた先生の姿」に関する記述の一部をご紹介したいと思います。憧れの先生に出会えた学生の喜びや学びの深さが窺えます。本学では引き続き、学生による実習自己開拓を進めていく予定です。実習園関係者の皆様、今後ともご指導のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

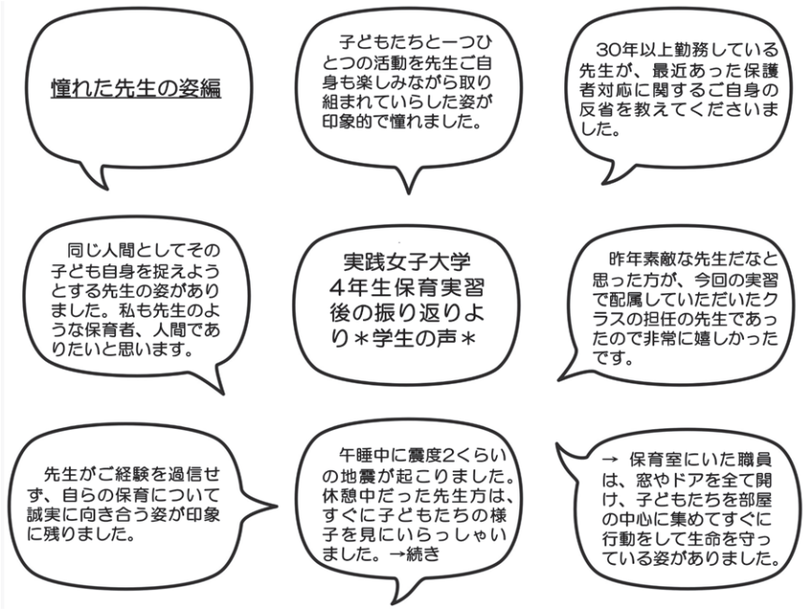


図2　4年生保育実習振り返り（一部抜粋）

幼児保育専攻

■「日野市保育の質ガイドライン策定に向けて」
―「子ども主体の保育」の実現を目指して―

本学生活文化学科 准教授　井口 眞美

【今求められる「保育の質の向上」】

現在、保育現場では、「保育の質の向上」が強く求められています。令和五年四月に新設されたこども家庭庁の資料では、保育実践の質の向上に向け、現場の保育士らと地域の学識経験者が協同的に関わる取り組みの実施が推奨されています。東京都日野市でも、日野市保育課職員の方々を事務局とし、本学科井口が策定委員会委員長、大澤朋子専任講師がオブザーバーとなり、公私立保育園長・職員らと協同で「日野市保育の質ガイドライン」の策定に着手しました。二〇二四年度末の完成に向け、日野市内の各保育園から実践事例を収集し、日野市の全保育園が「子ども主体の保育」という同じ方向性をもち保育の質向上を図るためのガイドラインを作成しているところです。

「保育の質向上ガイドライン」とは何を目的として策定されるものなのでしょうか。保育園の保育は、当然のことながら「保育所保育指針（厚生労働省刊行）」の示す内容に準じて実施されることが義務付けられています。加えて、厚生労働省は「保育所における自己評価ガイドライン（二〇二〇年改訂版）」を策定し、保育所保育指針に基づき保育の質の確保・向上を図ることを目的に「保育内容等の評価」についての基本的な考え方や留意すべき事項を明らかにしました。ここでは、「子どもの理解」を基盤とした保育の自己評価の在り方が示されましたが、その後も、一部の保育園では、依然として不適切な保育が行われるという現状がありました。日野市においても、一保育園における不適切な保育に関する報道がなされたことで、各保育園が保育実践を見直した一方、自らの保育行為に自信をなくしたり、保育の方向性を見失い、戸惑ったり不安を抱いたりする保育士も現れたと聞いています。こういった実態をふまえ、日野市では、市内の全保育施設において「子ども主体の保育」「不適切な保育の未然防止」の実現に向け、「日野市保育の質ガイドライン」を策定することになりました。

とはいえ保育に関するガイドラインは、日々の保育のノウハウを示したマニュアルではありません。ガイドラインは、行政担当者と保育現場が、より質の高い保育を実施するための認識を共有できる重要なツールなのです（「不適切保育に関する対応について」事業報告書、二〇二一）。

保育の質向上を目指し、保育の質ガイドラインを策定している自治体は少なくありませんが、各自治体において策定したガイドラインの活用の実態については明らかになっていません。そこで、「日野市保育の質ガイドライン」を単に策定して終わりではなく、多くの保育士らが策定に関わり、その策定過程における保育に関する気づきを大切にしたい、保育現場で有効に活用されるガイドラインを完成させたいと考えました。また、私個人としても、策定後の保育内容の変容を調査し、保育実践の質向上のために有効なガイドラインの活用方法を検証する研究に取り組むことにしました。

【海外の取り組みや他市のガイドライン】

アメリカでは、NAEYC（National Association for Education of Young Children）がナショナルスタンダードを示していますが、各州や諸研究機関でガイドラインを策定し、地域ごとの保育が展開されています。このガイドラインは、地域性を発揮した保育を実践するために大切な役割を担っています。また、ニュージーランドでは、全国保育カリキュラム「テ・ファリキ（Te Whāriki）」に基づく「自己評価ガイドライン」が全国統一的に示され、自己評価が重視されています。このニュージーランドの例にならい、保育の質向上のため、日野市のガイドライン活用の一環として、保育を自己評価するプロセスを組み込むことにしました。

他市区町村のガイドラインを見てみると、川崎市では、二〇一七年に「保育の質ガイドブック」を策定、二〇一八年には「保育の質ガイドブック」に示された保育について、保育士の理解をより深めることを目的とした事例集を作成しています。このガイドブックや事例集は、市の研修会や各保育所の自己評価の資料として活用されています。八王子市では、二〇一八年に、市内の公立保育所を対象としたガイドラインを策定し、市内公立保育所に配布をしました。更に、二〇二二年には、対象を保育所・幼稚園・認定こども園に拡大し「乳幼児期の教育・すくすくてくてくガイドライン～八王子市 乳幼児期の教育・保育の質に関する指針～」を策定しています。ここでは、八王子市の「保育の理念」を示し、各園から収集した保育者の援助方法にまつわるエピソードを多数紹介しています。

日野市では、後発ではありますが、こういった多くの自治体の先行事例を参考にして「子ども主体の保育」「不適切な保育の未然防止」を主軸に置き、市内の各保育所から実践事例を収集し、保育士らが活用しやすいガイドラインづくりを行うことにしました。

【策定過程を大切に】

策定委員会では、ある保育園園長から「子ども主体、子どもが楽しい保育園は大前提だが、保育者も楽しいことが大切」とのお話がありました。保育業務は多忙ではありますが、保育者自身も楽しく笑顔で毎日が送れるような保育所でありたいとの現場ならではの見解も大切にしたいと考えています。

現在、各保育所から事例を集めているところですが、案外、自分の保育園以外の取り組みを保育士らは詳しく知りません。自らの保育実践を言葉にすることで保育を見直したり、他園の実践に触れ、自分の保育に取り入れたりと、策定の過程こそが保育の質向上に役立つと考えています。このガイドラインによって、日野市内の全保育所において同じ方向性を見据えた保育実践が可能となるだけでなく、各保育所のよさを保護者や関係者の方々に対してアピールできる資料になればと願っています。

幼児保育専攻

■ 教育現場での得難い学び
～日野市立小学校との連携～

本学生活文化学科 専任講師　井上 陽童

一．はじめに

幼児保育専攻では、日野市の行政をはじめとした様々な施設と連携しながら教育活動を行っています。本稿では、今年度の日野市立小学校との連携についてご紹介します。

二．小学校での授業参観

今年度も、大学一年生の「保育・教育の基礎」、二年生の「保育・教育の実際」の講義において、日野第一小学校及び日野第七小学校に伺い、実際の学習や生活の様子を参観させていただきました。一年生の中には、自分の卒業以来、久しぶりに小学校に足を踏み入れた学生もいて、懐かしさに喜びの声を上げている様子がありました。

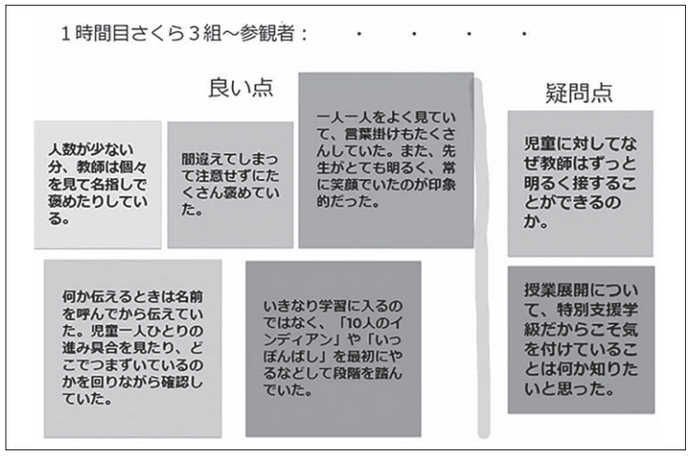
大学一年生は、近年の教育課題として挙げられている「小1プロブレム」の問題を念頭に、幼稚園・保育園と小学校との違いや共通点を意識して見学しました。二年生は、小学校の低・中・高学年の発達段階の違いや、発達段階ごとの教師の関わり、授業の進め方の違いを意識して見学しました。

見学が終わると、参観の授業内容と学んだこと、自身の今後の課題を実習日誌形式のレポートにまとめました。この経験が、四年生で行う教育実習で活きることになります。

◇資料①　授業参観のふり返りレポート（一年生）

水泳の授業では、子どもの安全が第一に考えられて活動していることが分かった。プールサイドでは、少し離れた所から「今、おしゃべりする時間じゃないよ。」と注意していたのに対し、プールの中での注意は、その子の前に行って、目を合わせて真剣な顔で注意をしていた。先生の態度から、子どもたちに水の危険性を教えようとしているように感じた。

◇資料②　オンラインホワイトボードによる授業参観のふり返り（二年生）



三．特別支援学級の授業参観

大学三年生の幼小コース十四名は、小学校教員免許の取得に必要な「介護等体験」実習の一環として八月末から九月初めにかけて、日野第一小学校の特別支援学級の参観を行いました。授業をただ見学するだけでなく、学習指導の補助をしたり休み時間に子どもたちとおしゃべりをしたりする中で、特別支援学級の一端を知る貴重な機会となりました。

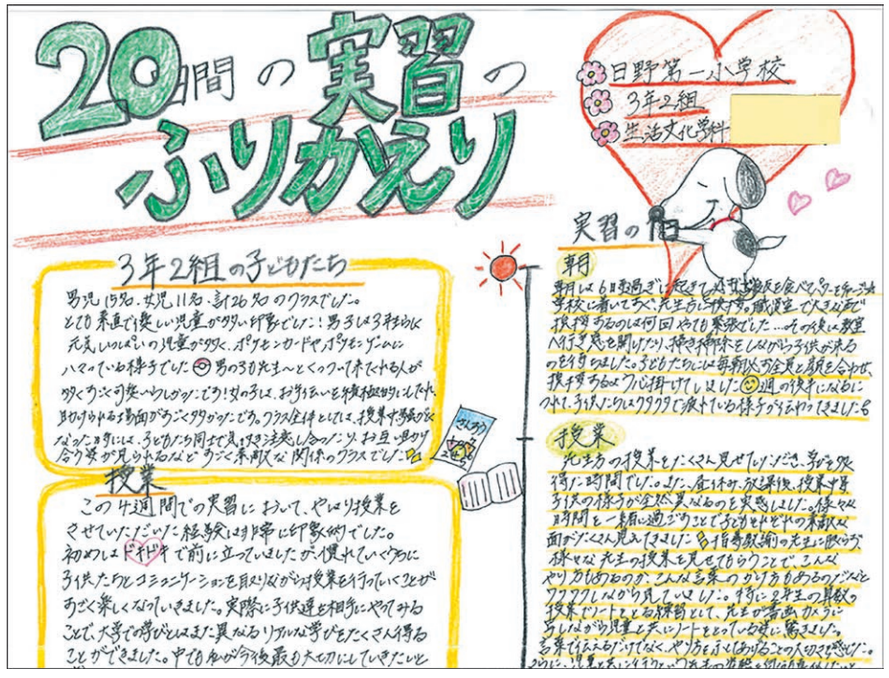
◇資料③　特別支援学級での二日間をふり返って（三年生）

個別学習に多く取り組んでいる場面があり、子どもによってやっていることが異なる中で、先生方はその子に合った方法でサポートしていて、子どもへの寄り添い方に驚いた。
先生方が、子どもに向けて話す際に、大きな声でゆっくりと、簡略的に表情豊かに話していたのが印象的だった。

四．小学校教育実習

大学四年生の幼小コースでは、五月から六月にかけて四週間の教育実習を実施し、今年度は三名の学生が日野市内の小学校で実習を行いました。四週間を通して、現職の先生方の授業を観察し、自身も授業を計画・準備し実践する中で教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに、課題を自覚する貴重な機会となりました。教育実習が修了すると、大学で事後指導の講義を行いました。実習での貴重な経験について語る学生たちの表情には、以前にはなかったたくましさを感じました。

◇資料④　教育実習のふり返りポスター（四年生）



幼児保育専攻

■子ども包括支援センター「みらいく」子育てひろばワークショップに参加して

本学生活文化学科　専任講師　大澤　朋子

近年子育てに大きな困難を抱える家庭がこれまで以上に顕在化してきています。令和四年の児童福祉法改正では、子育て世帯に対する包括的な支援のための体制強化及び事業の拡充のため、従来の子ども家庭総合支援拠点と子育て世代包括支援センターを見直し、すべての妊産婦・子育て世帯・子どもの包括的な相談支援を行う「こども家庭センター」を市町村に設置することを定めました。日野市では、令和六年度より子育ての総合拠点となる「子ども包括支援センターみらいく」（以下、「みらいく」）を、実践女子大学短期大学部跡地に開設することになっています。

「みらいく」には市の行政窓口のほか、乳幼児親子を対象とした子育てひろばや、中高生世代の居場所が常設されます。「子育てひろば」のデザインや、そこで実施するプログラムの検討にあたり、令和四年度には「子育てひろば」を利用する市民、子育て関連施設・団体の関係者、実践女子大学の学生と教員、日野市職員が集まって全五回のワークショップが行われました。本学からは大学院生の細淵みつきさん、生活文化学科幼児保育専攻の奥脇唯さん、斉藤李実さん、島田真佑希さん、橘清乃さん（いずれもワークショップ時三年）と、教員の井口眞美、大澤朋子が参加しました。学生たちは地域の子育て支援に関心を持っており、事前に上級生が授業で考案した子育て支援制度や子育て応援イベントの案を検討し、イメージを膨らませてワークショップに臨みました。

第一回のワークショップでは、参加者が持ち寄ったイメージ写真などを材料に、「子育てひろば」がどういう場所になってほしいか、目標像を話し合いました。本学から参加した学生たちも、事前に準備したスライド（図1）を用いてアイディアのプレゼンを行いました。第二回では、「子育てひろば」の設計図を見ながら、必要な設備、レイアウト、すべての利用者が安全に利用できるようにするにはどのような運用上の工夫が必要か検討しました。第三回は屋外で、実寸大の図面を描きながら各エリアの中身を具体的に検討、第四回はイベントや運営のあり方を検討しました。第五回にはこれまでの話し合いの内容が整備方針（図2）に活かされているか確認を行いました。

ワークショップへの学生の参加は、日野市子ども部からお声かけいただいて実現したものです。幼児保育専攻では一・二年次の見学観察実習から、三・四年次の保育実習・教育実習、また子ども家庭支援センターでの保育活動など、日野市から学びの機会をいただきながら、大学と市の交流を続けてきました。今回ワークショップに参加した学生たちも大学の代表として積極的に発言し、自信を深めたようです。また市民参加者の意見を聞き、行政の代表者とも議論を重ねてきました。子育て中の保護者のリアルな声に触れ、子育てひろばの夢を語りながら、学生自身の保育観も明確になったようでした。公的な機関が行政の計画だけでなく、市民の意見を取り入れながら作られていくプロセスを間近に見るという貴重な機会となりました。

「子育てひろば」開設後は、二〇二四年度新規開講科目「保育・教育指導の基礎ｃ」の一環として学生がボランティア活動に参加することになっています。地域と繋がりながら学ぶことができる本学の特徴を活かし、幼児保育専攻の特色あるＰＢＬ科目となる予定です。

図1　学生プレゼンスライド

ワークショップの様子

『みらいく』子育てひろばの整備方針

（1）”行ってみたい“と思えるような特別な魅力がある場
（2）子どもと保護者がともに楽しい時間を過ごせる場
（3）子育ての支えになるような多様なつながり（中高生や大学生、専門機関等）や交流が生まれる場
（4）みなを暖かく迎え入れてくれる場
（5）安全に遊べる／安心して遊ばせられる場
（6）ひろば外とも気軽に行き来ができる開かれた場

図2　「みらいく」整備方針

幼児保育専攻

■日野市「手をつなごう・こどもまつり」活動報告

本学生活文化学科 助教 小坂 光

日野市では、日頃から地域で子どもたちのために活動している市内の団体・行政機関が実行委員会として連携・協働し、毎年秋に「手をつなごう・こどもまつり」が開催されています。昨年度より、開催場所が日野中央公園から日野市市民の森ふれあいホールと仲田の森蚕糸公園へと移り、当日には遊び・工作・展示、模擬店のブースが並び、子どもたちが楽しめる場として大勢の人でにぎわいます。また、子どもたちによる吹奏楽やダンスなどの発表など、子どもたちが日頃の成果を発表できる場としても盛り上がります。生活文化学科幼児保育専攻の一・二年生も毎年参加させていただいています。

一年生は「あそびのひろば」と題した実践女子大学のブースで、千五百個用意した色付きの紙コップを使って、巨大タワーやアーチを作ったり、色ごとに並べてみたり、子どもたちと一緒に思い思いの遊びを展開していました。「作る」だけではなく作ったタワーを「壊す」ことができるのも、このあそびのひろばの楽しいところです。「みんなでタワーを壊すぞ！」という場面には、保護者の方が一斉にカメラを向け、子どもたちの輝く笑顔の瞬間を写真に収めていました。

一年生は初めての参加で、授業内の説明だけではイメージをつかみづらいため、数日前に全員でふれあいホールに足を運んで下見をしました。また、授業の一環として児童館の見学に行った際には、こどもまつりのオープニング・フィナーレで踊る《そらに響け！ヒノソング》の振り付けを児童館の職員の方々に教わり、当日は楽しそうに踊る学生たちの様子が見られました。

二年生は一時間のステージをいただき、子どもたちも参加できるゲームやダンスの企画、紙しばいや絵本の読み聞かせ、楽器やハンドベル演奏、ペープサートやパネルシアターの披露を行いました。二年生は二回目の参加ということで、夏休み前の早い段階からステージに向けてのイメージを膨らませていました。発表や企画の内容を考えることももちろんですが、「子どもたちが楽しく参加するためにはどんな言葉かけが

実践ブースの様子

必要だろう？」と試行錯誤していました。

ブースやステージの発表だけではなく、学生は駐輪場の交通係や児童館のボランティアとしても活躍します。児童館ブースで工作のお手伝いを行った学生から、「子どもたちが意外と手先が器用でびっくりした」「年齢に合わせて手助けしたり、見守ったりできた」という感想がありました。手形アートの補助を行った学生からは、「小学生も幼児も赤ちゃんも色んな人の手形があって素敵だった」という声があり、普段、大学の授業では経験できない子どもとの関わりができる貴重な機会となりました。

どの学生も、子どもを目の前にすると輝く笑顔になり、楽しくコミュニケーションをとっている姿がとても印象的でした。この経験が今後の大学での学びにつながっていくことを期待しています。主催の日野市子ども部子育て課の皆様、手をつなごう・こどもまつり実行委員会の皆様、ありがとうございました。

←↑ステージの様子

ボランティアの様子

幼児保育専攻

■ 就職支援報告
―公務員（保育・教育職）就職支援の取組―

本学生活文化学科　教授　田中　正浩

採用試験の朗報は、学生本人はもとより私たち教員をも笑顔にし、元気にしてくれます。保育・教育者養成に従事する教員として教育活動への励みにもなります。振り返れば、今年度も多くの朗報を受けてきました。なかには残念ながら願い届かずという場合もあり、言葉を選びつつ後押ししたこともありました。教員にとって、学生らの就職活動を傍で見守り、時には旗を振りエールを送り、夢実現への支援をすることはとても大切な役割と感じています。この度は、本専攻にあって、保育・教育職の公務員として現場に立つ（就く）ことを目指してきた学生たちへの就職支援の取組について報告します。

本専攻は、保育士資格及び幼稚園教諭免許取得を目指す「幼保コース」と幼稚園教諭免許と小学校教諭免許取得を目指す「幼小コース」からなっています。当然ながら目指すは免許・資格取得の上で、保育や教育の場に立つ（就く）ことです。多くの学生がそのことを目標に照準を合わせ、準備をしていきます。教え、指導してきた学生らを、望む場に送り出すための支援に労を惜しまずということは私たち教員に認識、共有されています。そのため、常に、学生にとって有効な支援の取組を模索してきました。

今年度、その取組の第一弾として実施したのは、七月二十六日㈬十三時から一時間半にわたっての小学校教員採用試験対策講座でした。これまで本学科の教育に理解と協力をいただいてきた日野市公立小学校・松永式子元校長をお招きしました。主なテーマは、小学校教員として求められることでした。採用二次試験直前ということもあり、講座は、早々に演習的に模擬面接から始まりました。松永先生が学生に向かって次々と問いかけ、答えを求めていきます。講義的に解説していくよりも、答えに対してコメントしていくことで、採用試験で何を求められるかを明確にし、学生に気づかせていくのでした。私たちにとっても実に有益な時間でした。この後、とくに二次試験（面接）を控えている四年生は、松永先生を訪ね、再度面接指導をしていただいたとのことでした。

続いては、九月十一日㈪十三時三十分から十五時まで、「公務員の仕事」をテーマに、長らく日野市公立保育園で園長職にあり、その後、日野市役所保育課に勤務された小野氏をお招きし、公務員保育士についてのお話を伺いました。私たちも、単に、公務員試験受験を勧めるのではなく、公務員に関心を持ち、公務員であるからこその仕事、役割などを知ることが重要であると考えています。そこで、公務員の仕事、保育職のやりがいなどについて実際的で具体的な話をしていただきました。一時間半にわたる話と質疑応答では、自身の将来を決める情報を得ようとその目は真剣で、充実した時間となりました。

以上のような取組を進めていくなか、今年度途中からではありましたが、新たな取組を始めました。それは、「保育・教育勉強会」の立ち上げです。学年やコースに拘わることなく、保育・教育の学びの場として、そして、保育・教育職、さらに事務職といった公務員試験に関する情報等を積極的に提供していく場を設けるというのが趣旨です。これは、すべての学年に対してのサポート、いわゆる切れ目のないサポートでもあります。

その第一回を「公務員試験（保育職）について」と題して九月二十七日㈬十六時から十八時まで実施しました。専任教員の井口と田中が保育士採用試験に関わる最新情報、とくに採用試験問題の傾向、対策としての学習法、教材（採用試験問題集）等を紹介、解説しました。当然ながら試験内容は自治体によって異なり、かつ出題傾向も変わってきています。学年によっては十分に時間があるので、情報を収集し、分析し、採用試験準備をすることを勧めてみました。

第二回は十月四日㈬十六時から十八時で、映画を視聴しました。第二次世界大戦末期の日本において、保育士たちが命がけで子どもたちを守ったノンフィクションです。スクリーン上で活躍していたのは保育士でしたが、保育者の使命、役割、仕事についてその本質に迫るほど深く考えさせられたようでした。同じ年代の保育士がその責務を全うする姿に心打たれ、一緒に視聴した教員たちとその思いを共有していました。

第三回は、十二月六日㈬一五時十分から特別講義を開講しました。昨年度まで専任教員として、主に幼小コースでの授業を担当されていた南雲成二先生（本学名誉教授）をお招きしました。小学校教員としての職能、小学校教師の面白さや生きがい、実習、教員採用試験といったことを話題にしていただきたいと依頼しました。実習や試験への迷いや悩みを僅かでも軽減させ、学生から「元気、やる気、本気」を引き出してもらえればと思ってのお願いでもありました。先生は、「子ども（学び手）と共に、成長し続ける教師について―個別最適な学習づくりと協働的な学習づくりを実践するうえで大切にしたいこと―」を念頭に自作テキストを用意して講義をされました。長きにわたる教師経験に裏付けされた、本専攻の学生たちの気質をよく知っての語りに学生たちは勇気づけられたようでした。

今後、「保育・教育勉強会」は、より一層プログラムを充実させ、学生の就活へのモチベーションを高め、夢実現に資する取組としていきたいと考えています。

Ⅱ 授業紹介、活動紹介

①生活の営みと生涯発達をとらえる

■ 生活文化史…… 34
笠原　良太　本学生活文化学科 専任講師

■ 授業紹介「生涯発達心理学演習ａ／ｂ」…… 35
塚原　拓馬　本学生活文化学科 准教授

■ 生活心理フィールドワーク２ …… 36
作田 由衣子　本学生活文化学科 准教授

②コミュニケーションの基礎を育む

■ 実践入門セミナー…… 37
塩川　宏郷　本学生活文化学科 教授

③地域や人とつながる

■ 日頃のボランティアを単位化 …… 38
小坂　光　本学生活文化学科 助教

④専門性を高める

■ 潜在能力を開花させよう！…… 40
髙橋　桂子　本学生活文化学科 教授

■ バリー・プリザント「Uniquely Human」
（「自閉症もうひとつの見方『自分自身』になるために」）
アップデート版を研究室卒業生らと翻訳刊行 …… 41
長崎　勤　本学生活文化学科 教授

■ 授業紹介～「初等教科教育法（国語）」
～スピーチ「show and tell」の授業づくり…… 42
井上　陽童　本学生活文化学科 専任講師

■ 卒業論文指導―保育学研究室―…… 43
野尻　美枝　本学生活文化学科 准教授

■ 運動生理学研究室における卒論指導…… 44
島﨑　あかね　本学生活文化学科 教授

⑤イベント報告

■ 2023年度生活文化学科オープンキャンパス …… 45
水野　いずみ　本学生活文化学科 准教授

■ 常磐祭での活動報告…… 46
井口　眞美　本学生活文化学科 准教授

■ 生活文化史

本学生活文化学科 専任講師 笠原 良太

「生活文化史」は、前期に理論編、後期に実践編を履修する積み上げ式の科目です。本学科二年次の必修科目であり、生活心理・幼児保育両専攻の学生が受講しています。

前期の「生活文化史1」（理論編）では、民俗学、考現学、社会学などの著名な研究にならいながら、生活文化を捉える視角を身につけていきます。とくに、近代化・産業化による生活文化の変容を、当時の研究者たちがどのように捉えたのかについて、彼らがおこなったフィールドワークを紹介しながら学んでいます。彼らの調査研究によって、約百年前の日本の生活文化（服装や食事、会話、労働、娯楽、歌謡など）を詳細に知ることができます。同時に、生活戦略、生活時間、消費行動といった生活文化の基礎的要素は、今日の生活文化を捉えるうえでも重要な視点です。学生たちは、この点を理解し、自らの生活文化について見つめ直しています。また、研究者たちの調査研究は、学生たちの探究心・行動力を刺激しており、本学科の目玉であるフィールドワークに関心を持つ学生も多くみられます。

そして、後期の「生活文化史2」（実践編）では、実際の資料にもとづいて、生活者目線で、より具体的に生活文化の変容を捉えるグループワークをおこなっています。主な分析資料は、子どもによる「生活綴方」です。戦後復興期から高度経済成長期にかけて全国で編まれた文集には、子どもの率直な生活認識が記述されています。子どもに関心がある学生が多いためか、多くの学生が意欲的にグループワークに取り組んでいます。ワークを進めるなかで、学生たちは、全国にさまざまな産業・地域があり、それぞれに固有の生活文化が展開していたことに気づいています。また、受講生自らの父母や祖父母が子どもだったころの生活に思いを馳せ、生活文化の世代間継承について考察する機会となっています。

この理論的学習と実践的学習のサイクルは、来年度以降も継続する予定です。とくに、子どもの生活綴方からさまざまな時代・地域の生活文化を読み解くワークは、本学科ならではの成果となるように、継続・蓄積していきます。

■ 授業紹介
「生涯発達心理学演習a／b」

本学生活文化学科 准教授 塚原 拓馬

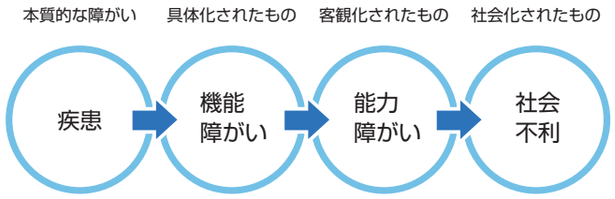
今回は、「生涯発達心理学演習a／b」の授業内容について紹介します。当該科目は、人の誕生から死に至る「生涯」の視点から、「インクルーシブ教育」について理解を深めることを目的としています。

まず、授業の初期において「障がい」ということについて考えていきます。「障がい」と一言で表現しても、その意味は幾つかの要素に分けて捉えられています。まずは、①医学的・生理学的な機能レベルでの障がい、次に②日常・社会生活における動作や能力レベルでの障がい、そして③役割や権利の遂行レベルでの障がいです。

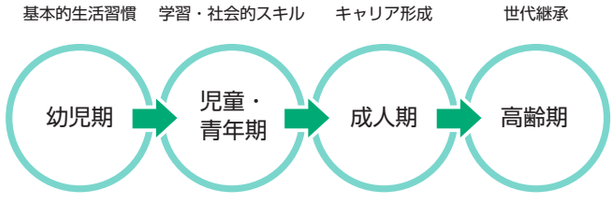
これらの「障がい」の捉え方のレベルによりどのような具体的違いがあるかを受講生たちは講義や演習を通して考えていきます。そして、「障がい」という言葉に包含された多様な意味や各レベルの関連性について理解を深めることを目指しています。

そして、この「障がい」が人の「生涯（ライフサイクル）」という時間的視点が加わったとき、どのような様相を呈するかという大きなテーマが生まれてきます。例えば、「うつ病」というこころの病について取り上げてみます。うつ病という症状は、気分の落ち込みや意欲の低下、食欲の低下や睡眠の問題など、様々な症状が現れます。この「うつ病」という精神疾患が、児童期において生じるのか、高齢期において生じるのかにより、同じ「うつ病」でもその症状を抱える当事者にとっての意味合いは大きく異なってきます。

「障がい」レベルの関連



「生涯」発達段階の関連



このように、障がいの特性と人の生涯の視点を織り交ぜながら、「インクルーシブ教育」について学習していくのが「生涯発達心理学演習a／b」という本講義の特徴です。

①生活の営みと生涯発達をとらえる

■ 生活心理フィールドワーク2

本学生活文化学科 准教授 作田 由衣子

「生活心理フィールドワーク2」という授業は、生活心理専攻の二年生の必修授業です。三クラスに分かれて、三名の教員がそれぞれ指導を行っています。以前は教員が大学近辺などの様々な企業や施設、研究所などに引率して見学に行き、社会の中で心理学がどのように関係しているかなどを学んでいました。

しかし、コロナ禍に入って以降、学生を引き連れて学外の施設を訪問するのも難しくなり、二〇二〇年は代わりに遠隔でのインタビューを行うこととしました。作田クラスでは、国立にある鉄道総合研究所の研究員の方にZoomでお話を伺うこととしました。学生にそれぞれ下調べをしてもらい、鉄道に関する疑問や聞いてみたいことをまとめてインタビューを行ってもらいました。施設の内部を見せていただくことはできませんが、この方式でも、実際に鉄道と心理学に関係するご研究をされている方のお話を伺うことができて、勉強になったと思います。

その後、少しずつ行動の制限が緩和され、二〇二〇年度からは学生それぞれで関心のある領域についてインタビュー先を探し、インタビューを行うこととしています。全員に共通するテーマとして「エッセンシャルワーカー」について扱うこととしました。コロナ禍の中で、二〇二〇年から二〇二一年にかけてリモートワークが普及し、大学でも遠隔授業が行われ、多くの人が外出を自粛していました。一方、その時期にもたとえば病院で働く医師や看護師、社会のインフラを支える方たちなどエッセンシャルワークに従事する方たちはリモートワークができず出勤しなくてはならないという当たり前のことを、私たちは改めて認識することになりました。

二〇二三年度、作田クラスで挙げられたテーマは教員、農業、医療関係、その他（産業カウンセラー、介護など）でした。インタビュー内容については、学生それぞれの関心に沿って文献資料などを読んで下調べを行い、得た知識やそこから生まれた疑問に基づいて考えてもらいました。昨年度・一昨年度あたりはコロナ禍による変化に焦点を当てたものが多かったように思いますが、今年度はそれ以外にたとえば農業のIT化など、ユニークな観点の調査もみられました。

学生たちは調査を通じて、この社会が多種多様な仕事に従事する方たちから構成されていること、文献やインターネットなどで調べただけではわからないような、実際にその仕事についている方に聞いて初めてわかるその仕事の実態などを実感できたのではないかと思います。

②コミュニケーションの基礎を育む

■ 実践入門セミナー

本学生活文化学科 教授 塩川 宏郷

二〇二三年度の一年生担任をしています。ここでは入学してすぐに始まる必修科目の「実践入門セミナー」をご紹介します。

入門セミナーでは、実践女子大学の成り立ちや歴史、大学生活の心構えなどについて学びます。またクラスに分かれ、自己紹介やグループでの話し合いを通じて今後四年間学修をともにする仲間とのコミュニケーションの土台をつくります。文末の写真は、各自の「座右の銘」をホワイトボードに書いてその前で撮ったものです。

今年度力を入れたのは「論理的な文章を読むこと・書くこと」です。このテーマは、一年生の後期で履修する「基礎演習1」に接続するものです。

高校までのレポートは（入試の小論文を含む）、どうしても個人的な経験を踏まえたエッセイや感想文になりがちです。自分の考えを、根拠を提示しながら論理的に書くことは、大学でのトレーニングの中心になり、卒業論文を書くうえでも必ず身につけなければならないことです。

論理的に書くためには、論理的に書かれた文章を読むことが重要です。入門セミナーでは、図書館の使い方を学習したのちに、各自が興味・関心のあるテーマについて、新書を選んで読むことから始めました。大学に入って最初に提出するレポートは、この入門セミナーでの「ブックレポート」ということになります。提出されたレポートは教員が点検し、コメントを加え返却、必要に応じて再提出を促します。読むこと、書くことは繰り返すことが大切で、反復することによって身についてきます。筋トレは裏切らないというのと同じく、読書は裏切りません。学生時代には、有り余るほどの時間を読書に費やしてください。書いたものは、だれかに読んでもらいましょう。メールやSNSだけでなく、手紙によるコミュニケーションも生活文化の中で重要な位置を占めていることに気づいてもらいたいと思います。

■ 日頃のボランティアを単位化

本学生活文化学科 助教 小坂 光

生活文化学科では学科基本科目において、①生活の営みと人間の生涯発達を総合的にとらえる力、②コミュニケーションの基本となる力、③地域や人とつながる力、の三つを身に付けることを目標としています。大学内だけでは関わりが限られるため、日頃から学生は地域の児童館や小学校、福祉施設などのさまざまな場所でボランティアに取り組んでいます。

生活科学部のキャンパスがある日野市では、すべての児童の放課後における安心安全な居場所づくりとして、小学校施設を活用した放課後子ども教室「ひのっち」が実施されています。「ひのっち」の総合的な調整を担う地域のコーディネーターさんのもと、放課後の小学校内の教室、校庭、体育館などに子どもたちの見守りをするひのっちパートナーが配置されており、本学の学生もパートナーとして活動しています。また、夏休みには朝から夕方までの子どもの居場所「なつひの」が実施されており、本年度は他学科も含め二十人程度の学生が各小学校へ出向き、一緒に遊んだり、宿題に取り組んだりしました。「大学生がパートナーとして参加する日の最後の時間には、子どもたちが『お姉さんは次いつ来てくれるの?』としきりに学生に尋ねていて、子どもたちは大学生と遊ぶのを楽しみにしているんですよ」とコーディネーターさんや日野市子育て課の担当の方からお言葉をいただきました。このような「なつひの」での体験によって、放課後子ども教室「ひのっち」でも引き続き多くの学生が活動を行っています。

また、日野市には十館の児童館があり、学生は随時ボランティアに参加しています。特に小学生が夏休みの時期には募集が多く、キャンプや水遊び、インディアンドッグ作りのお手伝いなど、体験活動のボランティアに参加している学生がいました。

さらに、小学校や児童館だけでなく、福祉施設の入所者さんが参加できるおまつりのボランティア、保育所や学習支援のボランティアを行っている学生もいます。学生が子どもたちと充実した時間を過ごすことができているのは、地域の方々の支援によるところが大きいと感じています。

これらのボランティアに関する情報は、生活文化学科助手室前の掲示板にチラシを掲示したり、オンライン教育支援サービスmanabaに「ボランティア情報」のスレッドを立ち上げたりするなど、学生が随時積極的にボランティアに取り組める環境を整えています。

十一月に開催された手をつなごう・子どもまつりの際には、幼児保育専攻一・二年生が児童館や子ども家庭支援センターのボランティアとして活躍しました。児童館ボランティアでは、各ブースで工作に一緒に取り組んだり、運動の記録を行ったりと、子どもたちと直接ふれあう機会を多くいただきました。子ども家庭支援センター主催の日野市出身の画家・蟹江杏さんとのライブペインティングでは、子どもたちの補助を行いました。

二〇二四年から始まる新カリキュラムから新しく開講される「保育・教育指導の基礎c」「保育・教育指導の実際c」では、継続的にボランティアを行うことで単位認定が可能になります。日野市の各施設にボランティアとして学生を受け入れていただくため、生活文化学科幼児保育専攻の教員と、ボランティア受け入れ先の先生や職員の方との懇談会を二月に開催する予定です。大学と地域の施設が連携することで、学生の教育機会としてだけでなく、地域の発展にも貢献できるよう進めていきたいと思います。

日野市では、子ども・家庭・地域の子育て機能の総合支援拠点として、二〇二四年に子ども包括支援センター『みらいく』が誕生します。「中高生専用の居場所」「子育てひろば」「相談室」などのさまざまな発達段階の子どもの居場所が開設される予定ですが、そのうちの一つとして、「実践女子大活動室」を設けていただいています。大学と、地域の子どもたちや保護者の方たちとがより近い形でつながることができる場所として活用できるよう、今後の活動を検討しています。

ボランティアで単位認定ができる新開講科目や、子ども包括支援センター『みらいく』の開設によって、学生がボランティアに取り組みやすい環境がさらに整備されます。学生の学びと地域のニーズを生かしながら、大学としての機能をより発揮できるよう、教員一丸となって取り組んでいきます。

■ 潜在能力を開花させよう！

本学生活文化学科 教授 髙橋 桂子

教育の最終機関である大学で過ごす四年間は「社会人生活の準備・トレーニング期間」です。我々教員は、大学はこれまでの被教育者とこれからの社会人・教育者とを橋渡しする特別な場である、といった覚悟と自覚を持ち、仮に弱い部分があればそれを補強し、各自が持っている強い部分はさらに伸ばし自信をつけさせ、個性に応じた極め細かいフォロー・ケアを施し、高い専門性・豊かな教養を保持する人材を世に輩出していくことが求められます。

私ども髙橋ゼミは、これまで在籍した学生さんたちが築き上げてくれた独特な文化、合い言葉を持っています。たとえば「十分前行動」、「笑顔で挨拶」や「何でも質問！」です。この独自の文化？香り？ に惹きつけられ、時には他学科の学生さんの参加もあったりします。大歓迎です。

卒業論文は、自分の関心に沿って、自分の特性に沿って、そして先行研究がしっかりあるものをテーマに選びます。PPTによるプレゼン、意見交換を通して切磋琢磨していきます。ゼミの様子を四年生、三年生にそれぞれ紹介してもらいましょう。

〈四年生〉 髙橋桂子先生のご指導の下、「現代社会をより良く生きていくために」をテーマに研究に取り組んでいます。三年次は、毎週水曜日にゼミ活動を行っています。様々な論文を読み、発表を行うことで、自分で研究を行うための基礎力を身に付けます。四年次には、卒業論文に取り組みます。研究テーマは、金融リテラシーや高齢者特殊詐欺、幼児の認知など多岐にわたります。ゼミ室に集まり、ゼミの仲間と共に意見を交換しながら、より良い論文を目指して執筆します。調査では、研究に合わせた方法を用いて、時には実際に現場に出向いて実験を行い、データを集めます。そして、HADやSPSSを使って分析します。他にはない新しさと自分らしさが溢れ出る卒業論文と仲間との思い出は、何物にも代えられない宝物になります。

〈三年生〉 私たちは主に経済学を研究するゼミです。行動経済学やマーケティングなど、ゼミ生の研究テーマは多岐にわたります。三年次では自分で探してきた論文を発表しあうことで様々な研究分野に触れ、四年次に書く卒業論文に向けて興味のある研究テーマを探していきます。勉強だけでなく、普段の話や相談事など、コミュニケーションを取りながら活動しているのが髙橋ゼミの特徴です。授業の形にとらわれず楽しく学んでいます。ゼミ活動が始まってから、一緒に課題に取り組んだり遊びに行ったりと、ゼミ仲間との素敵な思い出が増え、充実した大学生活を送っています。髙橋先生は自己肯定感をあげて私たちの決断の後押しをしてくれます。ゼミに入ってから色んなことに挑戦する勇気が生まれ、行動力が身についたと思います。目標に向かって仲間と過ごす二年間は、大切で、かけがえのない思い出を作れると思います。

■ バリー・プリザント「Uniquely Human」（「自閉症 もうひとつの見方『自分自身』になるために」）アップデート版を研究室卒業生らと翻訳刊行

本学生活文化学科 教授 長崎 勤

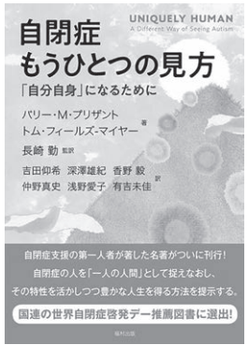
自閉スペクトラム症のための「SCERTSモデル」の開発者・著者のバリー・プリザントが二〇一五年に、「Uniquely Human-A different way of seeing autism」を刊行しました。この著書を長崎研究室の卒業生らとともに翻訳し、「自閉症 もうひとつの見方『自分自身』になるために」として二〇一八年に福村出版から、日本で刊行しました。日本でも沢山の読者を得て、二〇二二年には三刷となりました。この本は、自閉スペクトラム症について、障害を治療しよう、なくそうとする捉え方ではなく、その子供の特性を活かし、成長・発達を支えていこうとする神経多様性（ニューロダイバーシティ）の観点からの自閉スペクトラム症理解のありかたを示しました。この著書は、ニューヨーク・タイムズ始め、多くの世界中のメディアで取り上げられ、評価され、世界二十六カ国で刊行されました。英語圏以外での刊行は日本が初でした。

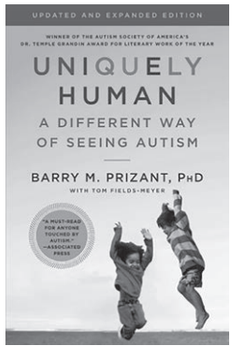
国際連合は「Uniquely Human」の大きな貢献を認め、二〇一七年の「自律と自己決定を目指して」をテーマにした世界自閉症啓発デーにおいて推薦図書として指定しました。また、アメリカ自閉症協会は「Uniquely Human」の多大な影響を認めて、二〇一七年の「Dr. Temple Grandin Award for the Outstanding Literary Work in Autism」〈自閉症のある方々とその家族の人生に貢献する著作を賞するもの〉に選出しました。

そして二〇二二年には、アメリカで本書のアップグレート版が刊行されましたので、現在その翻訳に取り組んでいて、二〇二四年三月には日本版改訂版を刊行予定です。

今回の改訂において一番の大きな変更点はパーソンファーストの表現（person with autism）からアイデンティティファーストの表現（autistic）に変わったことです。パーソンファーストは「自閉である”前に“人間である」という考え方が反映されている表現で、アイデンティティファーストは、「自閉は自分とは不可分である」という考え方が反映されているといえます。

新たに追加されたもう一つの章である十二章では、「自閉」との出会いが境となった八人の当事者のストーリーを通して、人がよりその人らしく生きていくために、できることや工夫が必要なこと、やりたいこと、大切にしていることなどを明確にして自分の輪郭をはっきり捉えていくことの大切さ、そして、その輪郭を認め、尊重してくれる他者とつながることの大切さについて示されています。刊行をご期待下さい。





■ 授業紹介～「初等教科教育法（国語）」～スピーチ「show and tell」の授業づくり

本学生活文化学科 専任講師 井上 陽童

一．講義の概要

本講義では、小学校学習指導要領に示された国語科の目標と内容について学びます。具体的には、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」を中心とした国語科の指導法の基礎を習得し、教師として必要な指導観を身に付けることを目指します。

二．実際の講義～スピーチ「show and tell」

本稿では、「A話すこと・聞くこと」の講義で行ったスピーチ「show and tell」という言語活動について紹介します。

「show and tell」は、主に小学校の低学年で行われるスピーチの一種です。一人の話者が全体の前で、実際にものを見せて（show）、そのものの特徴や思い出を詳しく伝え（tell）ます。今回、スピーチのテーマは、「自分の宝物」としました。

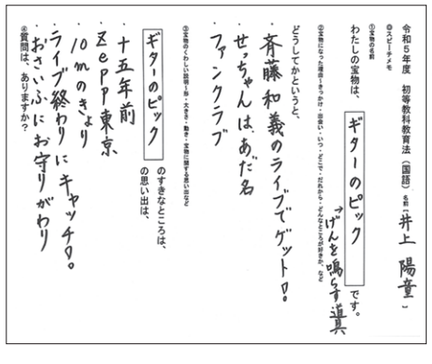
◇資料① 単元計画

① 「自分の宝物」を決めて、伝えたいことを集める。
② スピーチメモをもとに、構成を考える。
③ スピーチの練習をする。
④ クラスのみんなにスピーチをする。
⑤ 感想を伝え合う。

学生は、学習者として言語活動を追体験しながら、教師役である稿者の講ずる「教師の手だて」について考察します。「自分の宝物」の実物や写真を持ち寄り、スピーチ原稿を作り、仲間の前でスピーチを行い質問に答える過程で話す・聞く力を高めるための授業づくりについて理解を深めていました。

◇資料② 学生の「私の宝物」

◇資料③ 教師のスピーチメモ例



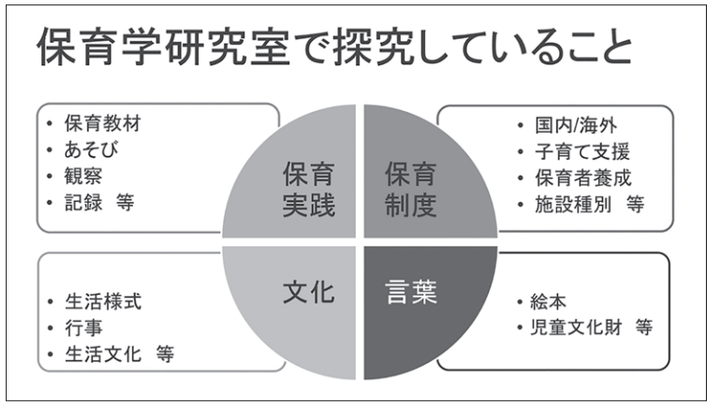
◇資料④ 学生のふり返り

- 好きなもの・思い入れのあるものは、エピソードがあるから話しやすい。
- 伝えたいことを簡潔にすることが大切！活動を繰り返すことで、声のトーンや表情など、話す力が身に付く。
- コツ「大きく・ゆっくり・はっきり」の大切さが分かった。
- 教師自身のお手本が大切。質問を引き出すサポートをする。

■ 卒業論文指導―保育学研究室―

本学生活文化学科 准教授 野尻 美枝

保育学研究室では、左図に示した四つの関連領域から保育学を探究しています。保育は、英語でEarly Childhood Education and Care (ECEC)と主に表記されるのですが、このCareという言葉には、「大切に扱う」、「心配する」「世話をする」、「関心をもつ」、「愛する」といったニュアンスが含まれています。



そこで保育学研究室では、四つの関連領域を柱としました。

一つめが、子どもに対するCareという意味でとらえた「保育実践」です。今年度の卒業論文のテーマには、子どもたちが自然（Nature）と出会ってどのような営みがなされ、何が育まれたのかを検討したものがあります。

二つめが、社会的な視座からCareをとらえた「保育制度」です。OECD（経済協力開発機構）が選定した五大カリキュラムの中から、ニュージーランドのテ・ファリキに関心を寄せた学生がいます。

三つめは、子どもの育ちに欠くことのできない「言葉」です。思い（想い）は、やがてノンバーバル、バーバル、それぞれの特性を生かしたコミュニケーションへと発展していきます。その言葉の育ちをCareする一面をもっているのが児童文化財といえるでしょう。デジタル化が進む潮流にありますが、現在、民話や絵本、絵本作家について複数の学生が研究を進めています。

最後となる四つめは、私たちの学科名でもある「生活文化」です。人々の生活は多様化しています。その文化的、あるいは歴史的な文脈を保育学の知見からとらえよう（Care）とする試みは、本学科の学生にとり、大変意味のあることだと思います。今年度は、クリスマスに着目した学生が、人と人との繋がりについて希薄化をキーワードに昨今のクリスマスにみられる生活文化について検討を進めています。

さて、保育学研究室では、現在十一名の四年生がこれらのテーマに基づいて執筆しています。自分が知りたいと思ったことをとことん探究し、それを活字にすることは決して容易いことではありません。しかし、成し遂げた喜びは格別だと思います。きっと彼女たちの成長の糧となることでしょう。

■運動生理学研究室における卒論指導

本学生活文化学科 教授 島﨑 あかね

二〇一八年度から運動生理学研究室のゼミナールが開講されるようになり、今年度の卒業生が五期生となります。私自身の担当授業は体育実技が多いため、三年次でゼミナールを選択する際に「運動生理学研究室では、ゼミの時間に運動やスポーツをやりますか?」と聞かれることもありますが、基本的にゼミナールおよび卒業論文では、「運動・スポーツ」「健康」「運動あそび」といったキーワードに関連する内容で、学生自身が興味・関心を持っていることについて、身体や心の変化を「運動生理学的なアプローチ」で探求しています。

ゼミ生は、生活心理専攻と幼児保育専攻が在籍しているので、学生の興味・関心も多岐にわたりますが、三年次のゼミナールで運動生理学の基礎となる「人体の構造の不思議さ」や「運動と身体の関係」などについて書籍を輪読したり、実際に身体を使った簡単な実験・測定を行うことにより、漠然と考えていた卒業論文のテーマを少しずつ絞りこんでいきます。そこから先行研究を読み進めると同時に、テーマに合わせて調査研究を進める学生、実験・測定研究を行う学生、文献研究を進める学生と分かれていきますが、運動生理学研究室では実験・測定研究を行う学生が多くみられます。これまでにも、「実験的にトレッドミル上を歩くのと、無意識の歩行では心身への負担度に違いがみられるか」や、「効果的なダイエットに必要なトレーニングと食事の関係」、「飲酒時の酔いに影響を及ぼす要因には何があるか」といった、自分だけでなく他のゼミ生や友人を被験者とした実験を実施し、データを分析しながら卒業論文として纏めています。ゼミ生は実験や調査、文献研究など、研究手法は異なるものの卒業論文を進めていく中で、思ったような結果が得られなかったり、意図しないような回答があったりと、一人ひとりが何度も壁にあたり躓きを感じていると思いますが、テーマを設定した時の「なぜ」や「この部分を探求したい」という思いを大切に、考察できるような指導を心掛けています。多くの学生は卒業後には企業や保育・教育の現場へ進むため、卒業論文を執筆する中で見つけた新たな課題についての研究を続けることは少ないかもしれません。それでも、卒業論文を通して明らかとなった新たな疑問や自分自身への課題を次のステップに向かう種として持ち続けられるように指導していきたいと改めて感じています。

今年度の四年生は、生活心理専攻三名、幼児保育幼保コース三名、幼児保育幼小コース二名と、これまでで最も専攻・コースにばらつきがある学年なので、卒業論文のテーマも多岐にわたっています。ゼミ生一人ひとりに合わせた、次へのステップが見出せるように、最後までゼミ生と一緒に走り抜けたいと思います。

■二〇二三年度生活文化学科オープンキャンパス

本学生活文化学科 准教授 水野 いずみ

二〇二三年度のオープンキャンパスは、予約制を基本としながら、対面形式での開催が主となりました。今年度は、例年の入学サポート部依頼のJ-STAFFに加えて、学科依頼のJ-STAFFへの依頼を開始し、学科コンテンツの充実に取り組みました。オープンキャンパスには、入学サポート部のみによる実施のものと、学科教職員による実施のものがありますが、十月・十二月の追加開催も含めて、学科教職員による実施のものは計九回となりました。

また、追加開催のミニオープンキャンパスでは、相談ブースのみの開設となったため、コロナ禍前に使用していた可動式の専攻紹介ボード（写真）を設置したり、学内ツアー時に普段の様子が伝わりやすくなるよう掲示（写真）を行ったりするなど、様々な工夫が試みられていました。

■ 常磐祭での活動報告

本学生活文化学科 准教授 井口 眞美

十一月十一日(土)、十二日(日)に本学の学園祭「常磐祭」が行われました。今年度は、両日ともに冷え込む天候ではありましたが、コロナ禍を経て四年ぶりの全面実施とあって、日野キャンパスに賑やかさが戻ってきました。

【生活文化ホームカミングデイ】

十一日には、生活文化学科ホームカミングデイも四年ぶりに開催することができました。生活心理専攻が発足して九年、幼児保育専攻が発足して十六年が経ち、仕事が忙しかったり子育てに追われていたりする時期の卒業生も多く、同窓生の繋がりをいかに広げていくかが、生活文化学科の課題となっています。

この日も、集まった卒業生は多くなかったのですが、今後、生活文化学科の同窓会組織「生活文化科会」を発展させていくための話し合いも行われました。在学中、教員と学生の距離が近い生活文化学科だけに、卒業してからも気軽に大学に足を運んでもらえる学科でありたいと心から願っています。

【特別講演】

四年間本学の非常勤講師をお勤めいただいた春日明夫先生（東京造形大学名誉教授、元本学非常勤講師）に特別講演をお願いしました。「玩具は生活の和みの形の道具であり、平和の象徴」というこの日のテーマに基づいて、戦前から戦後のアメリカ・日本の世相と、玩具の変遷とを重ね合わせてお話しくださいました。また、数多の『春日コレクション』の中から、ディズニーにちなんだ玩具をご持参くださり、講義後には、貴重なおもちゃに触れられる機会もありました。参加されたみなさんには、充分ご満足いただけたことと思います。

【パネルシアタークラブ】

ほとんどが幼児保育専攻の学生で構成されるパネルシアタークラブの四回にわたる公演は、近隣の親子連れや本学OGで会場がいっぱいとなりました。三年生は、この常磐祭で部活動を引退とあって、想いもひとしお。『はらぺこあおむし』『だれにだっておたんじょうび』といったお得意演目を、素敵な笑顔で堂々と演じていました。次代を担う一、二年生も自分の役割をしっかりと果たしており、今後も部活動を頑張って推進してくれること間違いなしです。

【カプラで遊ぼう】

研究プロジェクト「保育教材研究所」の紹介の一環として、I館一階の図工室のフロアーを広く使って、カプラ®ブロック（通称カプラ）で遊ぶ場所を設けました。「他の所も見に行きましょうよ」とお母さんに言われても、「やだ、またカプラやる」と長時間遊び続ける子、たっぷり遊んだ帰り際に「楽しかった。また来るね」と笑顔で去っていく子等、乳児から大人まで、たくさんの人たちとの出会いがありました。日曜日は最後まで遊び続けてくれた五人のご家族や心理プロムナードを運営していた生活心理専攻三年生と共に、「いっせいのせ！」でかまくらを壊し、片付けをしました。大人も子どもも、何かにハマってじっくり遊ぶ時間の大切さと、研究のやりがいを改めて実感した二日間となりました。

生活文化学科では、この他にも、「心理プロムナード」（18～19ページ参照）や、「高橋ゼミ」の発表等、たくさんの在学生たちの活躍がありました。来年度の常磐祭にも乞うご期待を！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

現在、生活文化学科では、着任年数の浅い教員も多く、我々教員の覚書のためにも、これまでに発行された資料を紐解いて、生活文化の歴史を簡単にご紹介させていただきます。

【生活文化学科のあゆみ】

一八九九（明治三二）実践女学校創設
一九〇八（明治四一）渋谷町に実践女学校付属幼稚園設立
一九四四（昭和一九）戦禍のため休園〈戦時託児所となり、戦後は自然廃園となる〉
一九四四（昭和一九）実践女子専門学校家政科に育児科を設置（四月）〈実践女子大学設立まで続く〉
一九四九（昭和二四）実践女子大学設立
一九九五（平成七年）家政学部の生活科学部への改称と同時に、生活文化学科開設
一九九九（平成一一）実践女子大学設立一〇〇周年
二〇〇五（平成一七）生活文化学科を生活文化学コース（定員四〇名）と、保育士コース（定員四五名）の二コース制となる〈保育士資格が取得できるようになる〉
二〇〇七（平成一九）生活文化専攻（定員四〇名）と幼児保育専攻（定員四五名）の二専攻を設置〈生活文化専攻では引き続き中学校・高等学校教諭一種免許状が、幼児保育専攻では幼稚園教諭一種免許状も取得可能になる〉
二〇一一（平成二三）幼児保育専攻が幼稚園・保育士コース（幼保コース）と小学校・幼稚園教諭（幼小コース）の二コース制となり、小学校教諭一種免許状取得が可能になる
二〇一四（平成二六）現代生活学科の開設に伴い、生活文化専攻を生活心理専攻へと改組〈認定心理士（心理調査）資格と公認心理師受験資格の取得が可能になる〉

Ⅲ 学生の取り組み

学生の生活紹介

■ フレッシュマンセミナーの内容と感想 …… 50
今井　綺星　本学生活文化学科 生活心理専攻 2年

■ 常磐祭を終えて
～二日間で見えてきた〝学びの原点〟～ …… 51
内田　美輝　本学生活文化学科 生活心理専攻 3年

■ 地域活動への参加…… 52
村岡　咲月　本学生活文化学科 幼児保育専攻 1年

■ オープンキャンパス
J-STAFFでの活動を振り返って …… 53
奥脇　唯　本学生活文化学科 幼児保育専攻 4年

下田歌子賞受賞者

■ 私の成長の要因…… 54
大石　美月　本学生活文化学科 生活心理専攻 4年

■ 実践で得た学びと今後の目標…… 55
島田 真佑希　本学生活文化学科 幼児保育専攻 4年

就活・院試体験記

■ 心理系大学院の受験を終えて…… 56
石見　千聖　本学生活文化学科 生活心理専攻 4年

■ 保育士採用試験を終えて…… 57
倉品　愛美　本学生活文化学科 幼児保育専攻 4年

卒論題目一覧

■ 卒業論文題目一覧…… 58

■ フレッシュマンセミナーの内容と感想

本学生活文化学科　生活心理専攻　二年　今井　綺星

まず、フレッシュマンセミナーについて説明します。フレッシュマンセミナーとは、歓迎会のようなもので、入学した一年生に向けて、実践女子大学の紹介や学科・専攻についての説明などを行うプログラムです。今年度のフレッシュマンセミナーでは以下の二つを実施しました。

一つ目は、自己紹介カードの作成です。同学年での交流を促すために、一学年の学生と学科の先生の自己紹介カードを作成しました。昨年度は、紙で配布し収集した後、それを台紙に張って冊子として作成しました。しかし、反省として、学生自身が冊子をすべて見られないことなどが挙げられました。学生は学科全体で八十名程度いるので、すべての学生の自己紹介を見ることなく、セミナーが終わってしまうのです。そこで今年度では、四、五人のグループを作成し、そのグループメンバーと学科の先生のみの冊子を作成しました。また後で詳しく記載しますが、このグループでスタンプラリーを行ってもらうため、そのメンバーが分かるようにそのメンバーのみに限って作成しました。また、manabaを使って全員分の自己紹介カードを閲覧できるようにしました。また、昨年度と違い、PowerPointを使用し、作成してもらいました。テンプレートは実行委員で作成し、それを見本に一年生に作成してもらいました。そのために、講義時間を少しもらい、授業内で指導を行いました。予想以上に時間がかかってしまいましたが、何とか作成することができました。

二つ目はスタンプラリーの実施です。体験しながらお互いの専攻に対しての理解することを目的として行うため、心理専攻、幼児保育専攻の特徴が分かる実習室などにチェックポイントを設置し、グループごとに時間を分けて行いました。これは、昨年度にも行い、私自身とても楽しく交流しながら行えたため、今年度も実施しました。スタンプラリーは、移動するだけでなく、各ポイントで課題があり、達成することでスタンプがもらえるというものです。課題は、実験や実習で使用する装置などを使用した簡単な課題を設定しました。実行委員は自身の専攻のポイントに先生と一緒に待っており、学生が回ってきたら説明を行っていました。私も一つのポイントを担当していましたが、様子を見てみて、専攻関係なく交流が行われており、楽しそうな雰囲気がうかがえました。

実行委員として活動してみて、予定通りにいかないことも多くありました。自己紹介カードを作成するときにパソコンにアプリをダウンロードしていなかったり、操作したことがなかったりと想定外のことも多くありました。しかし、得られたものも多くあり、大変ではありましたがやってみてよかったと思います。大学生になり、高校のように行事が強制ではないため、自ら行動を起こさないとこのような体験もできません。社会人になる前に様々な体験をしてほしいです。

■ 常磐祭を終えて
～二日間で見えてきた〝学びの原点〟～

本学生活文化学科　生活心理専攻　三年　内田　美輝

「すごい！魔法みたい！」

一気に表情が明るくなったその子を見て、私はとても嬉しくなりました。同時に、忘れかけていた何かにも気づかされた思いでした。「すごい」「面白い」という感情は「もっと知りたい」につながる学びの原点ではないでしょうか。

新型コロナウイルスによる制限がなくなり、完全に対面で常磐祭が開催されたのは三年ぶりになります。不安を感じながら手探りで準備を進めていましたが、私にとってもこの二日間は、学びと喜びの連続でした。

コロナ以前は毎年恒例だった「心理学体験」のコーナーは、本年度も社会心理学研究室の皆さんと合同で行いました。心理学の実験器具に実際に触れていただくコーナーです。ミュラーリヤー錯視・逆さ眼鏡・鏡映描写・うそ発見器（PGR測定器）などを用意しました。加えて、作田ゼミでは新たな取り組みとして、簡単な工作を通した錯視の体験を企画。用紙のグレーの線が交差した部分に白い丸シールを貼ると、黒い点が浮き上がり動いて見える「ハーマン錯視」、白と黒のマーカーペンを使用し、グレー調の市松模様の交差部分に十字を規則的に描いていくことで、用紙が歪んで見える「フレーザー・ウィルコックス錯視」を用意しました［北岡明佳，2014］。一方で、こうした準備を進める中で、楽しんでもらえるだろうかと不安になることもありました。

しかし迎えた常磐祭当日、お越しくださった方々は初めて見る実験器具に興味津々。小さなお子さんを連れたご家族でのご来校も多く見られ、錯視工作のブースも大変多くの人で賑わいました。工作を完成させた見本を「これ、どんなふうに見える？」と子どもたちに渡すと、皆口々に驚きの声を上げ、ある女の子は「すごい！魔法みたい！」と表情を明るくしていました。

この時、私は大切なことを忘れていたとハッとしました。それは、学びの原点ともいえる、感情の変化です。機械的に知識を詰め込んでいるだけでは、短期的な記憶にしかなりません。何か新しいことに出会った時の喜びや、気持ちの変化をもっと大切にするべきだと思うのです。こうした感情の変化は興味につながります。自ら工作を楽しんでいたその女の子は、まさに学びの本質を捉えた体験をしていたのだと思います。

完全な対面で実施された常磐祭を通して、心理学の魅力をたくさんの人にお伝えすることができたと実感しています。そして私自身、新しい学びを得た大切な二日間となりました。常磐祭の開催に携わってくださったすべての皆様、ご支援くださった皆様に改めて感謝申し上げます。

■ 地域活動への参加

本学生活文化学科 幼児保育専攻 一年 村岡 咲月

私は、学業のほかにも児童館のリーダーさんやジュニアリーダー講習会という活動団体のボランティアスタッフなど、地域の子どもたちとの活動にも積極的に参加しています。

きっかけは小さいころから児童館に遊びに行っていたことです。友達のほかにも職員の方々や低学年・幼児の子どもたちとの交流が自然とできていたので、優しくふれあい仲良くなる力、小さい子たちと関わるのが楽しいという気持ちが育まれていきました。また、中学生のときは卒団したミニバスケットボールチームに遊びに行って下級生の練習を教えていました。ジュニアリーダー講習会でも、副班長や班長を務めて、レクリエーション活動とは別の視点からも大きく成長できたと思っています。「楽しく利用していたからこそ、次代の子どもたちも楽しく利用してほしい」「当時してもらっていたことを提供できるようになりたい」と思い、微力ながらも高校生のうちからイベントのお手伝いや企画運営をやってみることで少しずつ経験値を積み上げています。

見様見真似で始めたリーダーとしての活動は、思うようにいかないことも多いのですが、その日の気づきや反省・他のリーダーの動きでマネしたいと思ったことなどをまとめてみることで、次の活動の時に注意して行動するようになりました。「まずは自分が一番楽しむこと」はリーダーとして最初に学んだスキルの一つです。活動を振り返ることで学んだ行動知識や注意しなければならないこととして、できないことではなくできることを探して任せてみること、安全に楽しく遊べる環境を準備することの大切さと難しさ、など今の授業で学んでいることに近いものもあります。実践経験から学んだことへの裏付ができることや、授業での学びをすぐに実践できる環境があることは記憶の強化にもつながっています。

他にも、市が主催である『手をつなごう こどもまつり』では、本学も出店する中、私はジュニアリーダー講習会として工作ブースを出店していました。前日までは団体の代表として事前会議に出席したり準備の指揮をとったりして、当日はブースに来た子どもたちの年齢に合わせて作り方の説明をしたり会話を楽しんでいました。ジュニアリーダー講習会では、子どもたちとのかかわり方だけでなく、事務局の方々との連携もあるので大人とのコミュニケーションや、企画に必要な資料作成などパソコンスキルも磨いていくことができます。

学業と同じくらい地域の活動に力を入れるのには、子どもたちの笑顔と成長に携われるだけでなく、その活動を通して私自身も様々な面で成長できるからです。何かを提供することで別の何かを学ぶことができるのだと感じています。活動準備にも授業課題などにも多くの時間を必要とするため両立は大変ですが、地域の中で楽しく成長できる場所を次の世代にもつなげていくために、積極的に活動を続けていきます。

■ オープンキャンパスJ-STAFFでの活動を振り返って

本学生活文化学科 幼児保育専攻 四年 奥脇 唯

オープンキャンパスJ-STAFFは当日の誘導や受付、企画、運営、広報活動などを学生が主体となって行っています。私は、大学二年生から組織の幹部として、より良いオープンキャンパス作りのために活動をしてきました。

オープンキャンパスには、本学への入学を考えている高校生やその保護者など、多くの方が来場されます。近年では対面式のオープンキャンパスが開催されていますが、以前は新型コロナウィルスの影響を受け、オンライン式のオープンキャンパスが主として行われていました。外部の方の来校が難しい状況で、どのようにして大学のことを伝えられるのか、職員の方や渋谷キャンパススタッフの方などの力も借り、様々な方法を考えてきました。例えば、大学の施設を学生と一緒に回ることができていたキャンパスツアーは、各施設の様子を動画にしたり、ブログを通して紹介したりするなどして工夫を凝らしました。開催方法が変更されても「あなたに寄り添うオープンキャンパス」というテーマを念頭に置き、スタッフ一人ひとりが活動してきました。私自身、本学のオープンキャンパスに参加したことをきっかけに入学を決めた経緯があります。そのため、来場される方々にもこの参加をきっかけに入学を視野に入れていただけるよう、力を入れてきました。様々な活動を行ってきた結果、来場者数は増加傾向になり、オープンキャンパス全体の満足度も少しずつ上昇していきました。

この四年間のJ-STAFF活動を通して、私自身のスキルアップや成長に繋がるような経験をしてきました。例えば、J-STAFFでは、活動の一環としてパソコンでの資料作成の機会が多くあったため得意になりました。特にPowerPointを使ったスライド作成は、普段の授業の中で役立つ場面が多くありました。デザインや情報のまとめ方など、はじめは右も左も分かりませんでしたが、先輩方にご助言いただくうちに、少しずつ技術を身につけていきました。今では楽しんで資料を作り出すことができています。また、この活動をする前は多くの方の前で話すことが苦手でしたが、トークライブやガイダンスなどを経験することにより、苦手を克服しました。学生生活や授業の様子など、他のスタッフと掛け合いをしながら話をするのですが、その中で来場者の方の表情が明るくなる様子が見え、その姿が非常に嬉しく、また楽しい気持ちになったことを今でも覚えています。このような貴重な経験を重ねる機会はそう多くはないかと思います。J-STAFFになったからこそ、実感できたものであったと考えます。

大学や学科の魅力を外部の方に様々な方法で発信してきましたが、私は実践女子大学のことがより好きになっていきました。オープンキャンパスJ-STAFFとして活動できたこと、そして、実践女子大学で学べていることを誇りに思います。

■ 私の成長の要因

本学生活文化学科　生活心理専攻　四年　大石　美月

新型コロナウイルス感染症の拡大により、入学式を行うことができず、キャンパス内に足を踏み入れることがないまま大学生活がスタートしました。右も左もわからないまま行った履修登録や課題の提出は、今振り返るとよく乗り越えられたなと感じます。

しかし、私はこの経験があったからこそ「大学は自ら学ぶ場所」ということを改めて認識することができました。これを意識し、積極的に勉学に励んだことにより、大きく成長できたように思います。四年間の中で、私を成長させた要因は二点あります。

一点目は、教職課程です。家庭科の教員免許状を習得し、教員になることを目標に取り組みました。自分自身で指導案を書き実践を行う模擬授業では、上手く授業を組み立てることができずに悩む日々でした。先生方や仲間にアドバイスを貰い仕上げた指導案を基に、初めて五十分間の授業をやり遂げた際の達成感は今でも忘れられません。また、家庭科ということもあり、衣食住に関する他学科の学びも多くありました。調理や被服製作などの実習を含む授業もあり、家庭科の教員は衣食住の全てをできなくてはいけないことを改めて実感しました。四年生の六月に実施した教育実習では、今まで学んだ全てのことを生かし、教壇に立ちました。三週間という短い時間でしたが、様々なことを吸収することができ、さらに教員になりたいという気持ちが強くなりました。

二点目は、ゼミナールです。入学当初から希望していたゼミナールに所属し、生活経済について知識を深め、経済領域に強い教員になるべく活動しました。企業訪問では、実際に名刺交換をさせていただき、社会人としてのマナーを身に付けることができました。また、先生にはリカレントでの登壇や後輩への学びの紹介など多く成長の機会をいただきました。この経験こそが、大学入学前と比べて一回りも二回りも大きく成長した私を作っていると強く感じます。

学祖である下田歌子先生の言葉に「女性の資質は、純一で慈愛に富み、その清らかな徳性とゆたかな情操をもって社会の弊を正し、広く世人に至福をもたらすことにある」というものがあります。これは、女性の清らかな道徳心と豊かな感性こそ、様々な人々を幸せにすることができるという意味です。私は、大学での学びを通して、特に豊かな感性に磨きをかけることができたと感じています。この豊かな感性をもって生徒たちと関わり、一人でも多くの生徒を幸せにすることが私の今後の目標です。そして、これが社会や世界を変えていくことに繋がると信じています。

最後に、四年間の努力を認めていただき、大変光栄であると同時に自分が誇らしいです。支えてくださった先生方や友人への感謝の気持ちを忘れず、今後も学び続けていきます。

■ 実践で得た学びと今後の目標

本学生活文化学科　幼児保育専攻　四年　島田　真佑希

この度、下田歌子賞という名誉ある賞を受賞させていただき、大変嬉しく思います。加えて、私がこのような賞を受賞するにあたって、支えて下さった先生方に御礼申し上げます。

私が実践女子大学へ入学した年である二〇二〇年は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、様々な困難に直面しました。入学式は中止となり、大学での対面授業は必要最低限での実施となりました。そのため、友人と大学で過ごすことよりも、自宅で一人で勉強することの方が多かったです。しかし、この状況は、課題に集中して向き合う時間を多く設けることに繋がりました。私は、このような時間の中で、課題に対して、自分自身が納得するまで修正を重ねることを意識しました。例えば、出題された問題文を読み込み、問題の意図を自分なりに解釈しました。そして、出題内容に関する情報収集を徹底して行いました。このように、課題に対して時間をかけて向き合うことで、自分自身が納得する答えをまとめることが出来ました。以上のような、課題に対して全力で取り組む姿勢は、今後も、社会人として働くうえで心掛けていきたいと思います。

本学での講義に関しては、他専攻の学生同士が意見を共有する場があることや実際に社会へ出て活動を行うこと、模擬保育を行うこと等を通して、多角的な視点から学びを深める機会が多く設けられていたことが印象的でした。私は本学での講義を通して、一人ひとり異なる考えを持っていることや他者の意見を聴くことによって、新たな知識を得られること、物事は複数の角度から考察することで本質を明らかに出来ることを学びました。以上のような、様々な人と関わる場で得た新たな学びは、自身の考え方の幅を広げることに繋がりました。加えて、様々な事象を捉える際は、幅広い視野を持って捉えることを意識することが出来るようになりました。今後、社会に出て働くうえでは、多様な事象を考える機会が多くあると思います。その際は、本学で習得した学びや身につけた考え方を活かして、事象の本質を捉えられるように心掛けていこうと思います。

大学生活に関しては、講義を欠席しないことを目標として常に心掛けていました。このような姿勢は、大学生だけでなく、社会人に対しても同様に求められると思います。なぜなら、毎日出勤することは、職場の方から信頼を得ることや、効率よく仕事をすることに繋がると考えるからです。このような目標を継続する姿勢は、今後の生活においても取り入れていこうと思います。

前述したような、四年間の大学生活の中で心掛けた姿勢や体験した多様な出来事、新たに体得した学びを今後の生活に活かして、実践力のある社会人になることをこれからの目標としていこうと思います。

■ 心理系大学院の受験を終えて

本学生活文化学科 生活心理専攻 四年 石見 千聖

私は、公認心理師の資格を取得するため、心理系大学院を受験しました。

大学に入学してから、公認心理師の資格取得を検討していましたが、一、二年の頃は課題やアルバイトに時間を割いており、受験に向けた勉強はほとんどしていませんでした。三年になり、ゼミに所属してからは、受験について具体的に考えるようになりました。ゼミの臨床活動などを通して、自分は児童福祉の分野で公認心理師として働きたいと考えるようになり、三年の一月頃からは、児童福祉の分野を学べる学校を調べ、オープンキャンパスに行き始めました。

受験勉強を本格的に始めたのは、三年の二月頃からでした。英語に関しては長文を読み慣れることから始め、スマホアプリで自分なりの単語帳を作成しました。心理学に関しては、入試で用語説明の問題が多いので、一ページに一つの用語をまとめるノートの作成に時間をかけました。また、院で何を研究したいかを書く研究計画書の作成は、四年になってから始めました。学科の先生に週一回の授業でアドバイスを受け、内容を固めていきました。並行して、オープンキャンパスで同じ分野の先生方にも内容を確認していただきました。そして、四年の秋頃には、私立校を三つ受験し、無事第一志望校から合格をいただきました。

大学院受験の経験を通して、継続することの大変さを感じました。まず、自分は公認心理師になって何をしたいのか、本当に資格が必要なのか、将来についてよく考えました。周りの同級生が就活を進めていく中、焦りや不安もあったのですが、同じ受験組の友達と話したりして、何とか勉強を続けることができました。先生には、受験や卒業してからのことについて沢山相談に乗っていただき、大変お世話になりました。

現在、公認心理師取得を考えている方は、大学院のオープンキャンパスに行ってみると、具体的なイメージがつくのでお勧めです。受験を決めたら、友達や先生に相談しながら、受験に向けて動いていくと良いかと思います。

～入試までに行ったこと～

3年 5月	英語の勉強を始める
3年 6月	心理学の勉強を始める
3年 9月	学校調べを始める
3年 1月	大学院のOCに行き始める
3年 2月	第一志望校を決める 心理学用語のノート作りを始める
4年 6月	心理学用語の アウトプットを始める 研究計画書の作成を始める
4年 7月	受験する学校を確定させる
4年8･9月	入試

【主に使用した参考書】

○心理学 キーワード＆パーソン事典
○公認心理師・臨床心理師 大学院対策
　河合塾KALS 心理学編・心理英語編
○心理院単
○よくわかる臨床心理士・心理統計

■ 保育士採用試験を終えて

本学生活文化学科 幼児保育専攻 四年 倉品 愛美

私は大学四年の時に、長野県諏訪市と東京都杉並区の二つを受験し両方とも合格いたしました。そして春から長野県諏訪市の公立保育所で働きます。公務員試験を終えた今、受験当日までに自分が行ってきたことを書きたいと思います。

はじめに、公立保育所を希望した理由ですが、大きく分けて三つあります。一つ目に幅広い子育て支援ができるという点です。公立保育所は自治体が管理しているため、その市町村全ての公立保育所での勤務が可能となります。約四年周期で異動となるため自身のスキルアップと同時に、より多くの子育て家庭の支援が出来ると思いました。二つ目に、給料や育休・産休の安定など自分のライフステージに合わせて仕事を行うことができるという点です。そして三つ目に、自治体によって保育所の他に障害者施設や子育て家庭支援センターなどの仕事をする機会を設けることができる点です。これらのことを実現させるために公務員試験の受験を決め、公立保育所への就職を目指しました。

次に公務員試験の勉強方法や準備内容についてですが、私が受けた諏訪市は専門科目のみ、杉並区は専門科目と小論文でした。私自身、教養科目がとても苦手だったため、教養科目を出題しない自治体を選びました。試験勉強は大学四年の六月、幼稚園実習の終了後すぐに始めました。毎日図書館へ行き、最低二時間以上は専門科目を解いていました。四年生は授業数もかなり少なくなるため、勉強に取り組みやすいと思います。小論文は大学の先生に添削してもらいながら、文章を書く練習をしました。

次に面接についてですが、私は大学の先生と学生支援センターの方に面接練習をしていただきました。面接を終えて思ったことはたくさん練習をして損はなかったということです。回数を重ねることで経験に繋がったと実感しています。もちろん緊張はしますが、笑顔を忘れずに明るくハキハキと自分の考えを話すことができるようになりました。また、諏訪市では面接試験の前に実技試験（模擬保育）がありました。自治体によっては実技試験もあるため、事前に指導案を作成するなど準備をして、将来の自分を思い描きながら臨むことが大切だと思います。

最後に、複数の自治体を併願する方へ伝えたいことがあります。私は受験した二つの自治体に合格し、最後の最後までどちらにするか迷いました。自治体に限らず、就職したいと思う園や施設が複数ある場合、受験先や進路を一か所に絞るためには、こういった悩みも出てくると思います。自分の選択を後悔しないように、家族や周りの人に相談したり、アドバイスをもらうなど慎重に就職先を決めることが大切だと思います。ぜひ、自分の夢に向かって頑張ってくださいね。

■ 卒業論文題目一覧

○ 塩川ゼミ

- アニマル・セラピーの心理的効果に関する研究
- いわゆる「乙女ゲーム」が与える心理的影響に関する研究
- 自分らしい死を迎えるために看取る側に必要なこと
  ―緩和ケア病棟と在宅医療の観点から―
- ＳＮＳ利用によるストレスについて
- 障害児の兄弟へのより良い支援法
  ―きょうだい児の精神発達と環境の観点から―
- 児童虐待における司法面接
- インクルーシブ教育における通級指導教室の役割
- 英語習得に関する日韓比較研究
- 家族介護の課題と介護者支援に関する研究
- 情動性の涙によるストレス緩和作用に関する研究
- コロナ禍における化粧行動の変化
- 一次救命処置の実施率向上に向けた取り組みに関する研究
  ―心停止からの生存率が高いシアトルとの比較から―

○ 塚原ゼミ

- いじめが与える自己への影響
- 大学生の学習意欲に対する自己観と他者との関連について
- 女子大生の共感性とストレスコーピング、月経随伴症状の関連性
- 大学生のＳＮＳ利用と自己肯定感について
  ―承認欲求との関連性―
- ＳＮＳ依存がコミュニケーション能力に与える影響
  ―コミュニケーション能力の変遷とＳＮＳ依存研究に着目して―
- 第二反抗期の有無と現在の親子関係について
- 推しがいる人の金銭感覚について
  ―青年期女性の自己肯定感と美容代の関連性―
- 睡眠時間が及ぼす学生生活への影響

○ 笠原ゼミ

- 児童養護施設における進路選択の課題
  ―家族に頼らず自立することの難しさ―
- 女性が働き続けるためにはどうすればよいか
  ―織物産業・地域の働き方に着目して―
- なぜ21世紀に「こども家庭庁」が発足したのか
  ―家庭イデオロギーと子ども・子育て政策―
- 子どもの発達により良い食事コミュニケーションとは
  ―社会階層、親の職業、家族形態に着目して―
- ロボットの発展から捉えるテクノロジーと人間社会の関係

○ 長崎ゼミ

- 自閉症児における探検ゲームの問題解決場面を通しての相互調整学習の支援
- 学祭「なかよしカフェ」参加者への障害理解調査と環境の構造化による子供・大人の支援
- 自閉症児の買い物場面における支払い支援
- 自閉症児の音楽活動を通したコミュニケーション支援
  ―パラバルーンを用いた同期の促し―
- 自閉症児におけるユーモアの発達と支援の試み
  ―エピソードの収集とコント活動を通して―
- 劇遊び「赤ずきんちゃん」を通した自閉症児への物語理解・「心の理解」の発達支援
- 自閉症児における球入れゲームを通した協同活動と自己調整学習の発達支援
- 自閉症児へのクイズ・なぞなぞ遊びを通したイマジネーションの促進
- 「オオカミと3匹の子ヤギ」での対話による自閉症児への物語理解と「心の理解」の支援

○ 作田ゼミ

- 髪色や化粧の違いが対人印象に与える影響
- 食に関わる視覚デザインの検討
  ～スイーツの写真と日本酒のパッケージデザインの印象評価～
- 共感覚によって生じる日常生活や社会生活における課題

○ 髙橋ゼミ

- 大学生のクレジットリテラシー
  ―自己効力感とＱＲコード決済との関連性―
- 意思決定の過程で感情覚醒が特殊詐欺脆弱性に与える影響
  ―二重過程理論を基にした性格特性との関連性―
- 幼児・児童の分配行動と認知的発達の関連に関する研究

○ 水野ゼミ

- 女子大学生の自尊感情、共感性、援助規範意識の関連性
- 小説ジャンルの嗜好と性格との関連
- 感情と共感性の関係性
  ―ポジティブ感情とネガティブ感情が共感性に及ぼす影響について―
- 不安感や孤独感と結婚願望の関連性
- 女子大学生の性格特性と社会的比較のしやすさの関連性
- 女子大学生の自己多元性と被服行動の関連性
  ―ＳＮＳの使い分け、ファッション行動をふまえての考察―
- 女子大生の自尊感情と友人関係における自己開示の関連
- ペット・ぬいぐるみへの接触と対人ストレスの関連
- ミュージシャンの外見の音楽の好悪との関連
- 女子大学生の痩身願望がパッケージ選択に及ぼす影響
- 自己愛的脆弱性と発話傾向の関連

○ 野尻ゼミ

- 共感力がはぐくむもの
  ―『赤毛のアン』マシューの対話から紐解く―
- 幼児期における自然を活かした遊びを通して研ぎ澄まされる五感の検討―観察調査を踏まえて―
- 子どもと自然との関わりの実際
  ―森のようちえんの保育に着目して―
- 民話を伝承していく重要性の探究
  ―千葉県の民話を通して―
- 仏加における保育・教育制度に関する研究
- お気に入りの絵本の様相 ―4歳児に注目して―
- ニュージーランドにおけるラーニング・ストーリーと保育実践について
- 日英のクリスマスにおける生活文化に関する研究
- 保育記録の変容に関する研究
- モーリス・センダックの絵本が愛される理由
- ミッフィーが愛される理由

○ 井上ゼミ

- 学級目標の意義と在り方
  ～学級経営の視点から～
- 保育学生の学年ごとの実習日誌に関する困難感
- 幼児保育専攻の学生におけるキャリア形成と、出産についての考え方との関連
- 学級目標を立てる意義と在り方
  ―学級経営の視点から―
- 授業の導入と学習者の意欲のつながりに関する研究

○ 大澤ゼミ

- 現代のアイドルの文化
- ＳＮＳマーケティングにおける Instagram アカウント運用について
- 自己肯定感を高めるＳＮＳの活用法に関する研究
- 子育て支援としての親子カフェの勧め
  ―子育て応援施設モグモグでの取り組みから―
- 経験の貧困から考える世代間連鎖
  ―「みんなの居場所　太陽堂」による子どもへの影響―
- 園内課外教室に関する研究 ―Ｓ園への実態調査から―
- 自己肯定感を育む保育について
- 子ども食堂の可能性 ―コロナ禍を経て見えてきたもの―

○ 島﨑ゼミ

- 音楽鑑賞が睡眠の質に及ぼす影響に関する研究
- 大学生の運動嗜好・スポーツ観に与える影響について
- 飲酒環境は人の酔いに影響を与えるのか
- きょうだいが自身に与える影響について
- セクシャルマイノリティを理解した上でのジェンダーフリー保育の実践と必要性について
- 過去の運動経験が現在の運動習慣に与えた影響
  幼少期からの持ち越し効果による好意感・得意感に着目して
- 大学生の自己肯定感とその要因に関する研究
- ディズニー・ヴィランズ―ヴィランズの悪の種類と変化―

○ 田中ゼミ

- 敏感な子どもが学校生活で抱える困難さについて
  ―生活しやすい環境と教員対応―
- 非認知能力の重要性についての研究
  ―非認知能力を育む要因は何か―
- かくれんぼ絵本『ミッケ！』に関する考察
  ―幅広い絵本の活用のために―
- 玩具を買い求める際の子どもの視点に関する考察
  ―最新の人気商品に着目して―
- 保育現場における環境構成を考える
  ―意欲を引き出すために―

○ 井口ゼミ

- 年齢別保育における異年齢の関わりの現状
- 保育現場における読み聞かせの実際
  ―しめくくりのあり方を中心に―
- 共働き家庭の子ども服のニーズについて
  ―保護者アンケートを基に―
- 幼児の持つ非認知能力を引き出す保育者の関わり
  ―5歳児のカプラ遊びの観察から―
- 保育現場における防災教育の在り方について
  ―「防災力」を高める保育教材の開発―
- 私立幼稚園の今後の存在意義
  ―私立幼稚園園長によるインタビュー調査から―
- モンテッソーリ教育を保育所保育指針に照らして検証する
  ―1歳から3歳未満児の保育に視点を当てて―
- 保育におけるおばけの扱い方
  ―保育現場での調査に基づいて―
- 互いの表現を認め合える鑑賞のあり方
  ―臨床美術の手法を用いて―
- コロナ禍が保育の行事に与えたもの
  ―子ども主体の行事への変容―

実践女子大学　生活文化フォーラム　第28号

2024年2月27日発行

編集者　生活科学部生活文化学科
発行者　（ホームページ https://www.jissen.ac.jp/learning/hles/seibun/）
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1
TEL　042-585-8918
FAX　042-585-8919
実践女子大学ホームページ http://www.jissen.ac.jp

「編集企画」協力・印刷所
日野テクニカルサービス株式会社
〒192-0916　東京都八王子市みなみ野5-28-5
TEL　042-637-6721
FAX　042-637-6270